
僕は違います

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は違います

【Nコード】

N3669X

【作者名】

琥珀

【あらすじ】

転生したので、今度の人生は絶対死なないようなチートを貰った。よし、これで死亡フラグは全部無効だ！…あれ、苗字が織斑？なんだこのフラグ。…え、僕がISに乗れる？いやいや誤解ですよ、これただのチートです。はい？IS学園に編入？いやいや、なんで僕が…って、東さん。なんで全世界のTVジャックしてるんですか？そして何故そんな笑顔をこっちに向けてるんですか——！？

これはISを生身でブッ倒すチート主人公
息抜きに書きました、連載力尽きたら
の物語である。

すみません。

オリ主注意

L i f e 0

少年よ、英雄を抱け（前書き）

息抜きをしたかったんですが、一作品エタった自分としては続けられるか非常に心配だったりします。

が、頑張るぞ…あともう一つのほうも頑張るぞ…

L i f e 0 少年よ、英雄を抱け

誰だって死ぬのは恐ろしい。

特に僕の場合はそれが顕著である。

なにせ一回死というものを経験したから当然だ。いやはや、ロクなものじゃないんだよアレ。両義式さんも言っていただろう？死と対面するのは静かなことじゃない、むしろ闘争に近いことなんだって。

僕も経験したのは一瞬だったけど、できれば二度と体験したくないレベルだった。もう口じゃ説明できないよ、おぞましすぎて。

まあそんなわけで、僕はバトル展開とか大嫌いである。

いや、漫画とかで他人がやるならいいけど、自分がやるのが嫌だって意味だよ？他人の努力を否定する気はない。ただ、自分だけは安全でいたい。心の底からそう思う。

だから、僕は神様からチートを貰う時にこう言った。

『大英雄ヘラクレスと同じ能力くれ。設定は型月準拠で』

Bランク以下の攻撃全部無効！おまけに12回まで死んでも大丈夫！

ATフィールドと迷ったけど魔術とか無い世界ならこっちのほうがいいに違いないッ！この最強の防御力を持つてすれば、僕の生涯は安泰だ！いやっほう！！

と、思ってた時期が僕にもありました。

『う、おおおおおおおおおおおッ！！』

——耳を少年の叫び声が満たす。

カギ括弧がついているのは別に彼がカッコ付けているというわけではなく、ただ単に『ISに乗っている』からである。

ちなみに言うなら、彼は現在、僕の身体よりもでかい剣を必死に僕に向かって叩きつけようとしている最中だ。

「——どうしてこうなった」

世の中はうまく行かないもの、なのである。

チート印の動体視力やら身体能力でIS…『白式』の白刃を紙一

重でかわしたり『素手で』ブン殴って刃を逸らしながら、僕は溜息をついた。

何が悲しくて、世界最強の兵器相手に『生身』で勝負を挑まなきゃならんのだ。いくらチートとはいえ色々やるせなくなってくる。加減してください。

…ああ、いや、向こうは僕のことを『装甲が無いIS』と認識してるから、遠慮も手加減も一切してこないのか。絶対防御を過信しすぎじゃね？まあ、実際間違っちゃいないんだけどね。その認識。

『こ、のおツ！！』
「おっと」

ISなりの空中機動を活かして振られた一夏の剣を、僕は最小限の動きで避ける。

…なんか段々、一夏の剣筋が冴えてきた気がするなあ。

剣道の勘が戻ってきたのだろうか？それにしだって空中の動きを織り交ぜた攻撃なんてそう簡単にできるものじゃないと思うんだけど。いやはや、よく戦闘中にそんなアツサりと成長できるな。主人公補正か。

ちなみに、こんなガチガチの近距離戦になってる理由はご存知のとおり、『白式』の武装には剣しか無いからです。男らしいね（姉さんも同じ装備だったけど）。

ついでに言っておくと、僕…つまり英雄ヘラクレスには弓の装備があるので、遠距離では意外と僕が有利である。まあ、さすがに弓がないと飛べない僕としては色々詰むからね。

まあとにかく、色々な事情から一夏はこちらに近づいて、斬る。斬る。

斬りまくる。

「…サラツと流してるけどこの状況、実は僕、けっこう怖い。『十^{ッドハンド}二の試練』といえどもちよつと気を抜いたら僕の身体は傷つくかもしれないし、そもそも受けた『衝撃』はあるので、痛くないとはいえ身体が停止する。」

だから、僕はわざわざ相手の攻撃を避けて、防いで、受け流しているのだ。

とはいえ、そんな状況であることを一夏が知るわけもなく、彼の口から出るのは文句ばかりであった。

『くそっ…なんで、『装甲が無い』のにこっちの攻撃を防げるんだッ！違和感ありまくりだろ！』

「それは束さんクオリティのせいだねえ。あと、いくら平気だつて言われたからって遠慮なく剣ぶつけるのはお兄ちゃんどうかと思うんだ」

『千冬姉に勝てる相手に手加減できねえよ、零夏ッ！』
「いや、僕が勝った時は姉さんIS乗ってないから」

ひょっとして、一夏の中ではIS<姉さん<僕、という不等号が並んでいるのだろうか…？微妙に間違っていないのが恐ろしい。

まあ、姉さんこと織斑千冬さんは生身でも超強いからねえ。そのせいか一夏も僕のことを変な意味で信用している気がする。

まあ、さすがに五次バサカことヘラクレスの能力を丸ごと保有してるんだ、これで生身の勝負に負けたら姉さんは英雄になっちゃうよ。IS乗ったら勝負はわからないけどね。

というか、僕はこういう戦闘とかが嫌だからこの能力を貰ったのに、どうしてこんなことになっているんだろうか？

どうしてこうなった。どうしてこうなった！

とりあえずは、一夏の攻撃を捌きながら、この状況を整理するにとしよう——

L i f e 0 少年よ、英雄を抱け（後書き）

というわけで始めました、『僕は違います』、タイトルにセンスが無いのはきつと気のせいだ！

あと元ネタがわかってても良い子はスルーだ！くれぐれもローソンに凸ったりしてはいけないぞ！

L i f e 1 大嘘吐き、世に憚る（前書き）

漂うマイナス臭。タイトルからも本文からもプンプンしてますね。
この更新速度いつまで続けられるのやら…

Life 1 大嘘吐き、世に憚る

ここはIS学園。

女性にしか扱えない兵器、インフィニット・ストラトスの扱いを学ぶ場所である。

数々の設備、優秀な教師などが揃えられたこの場所は当然ながら女子高である。世界にISについて学ぶための学園はここしか無いので、周りを見渡してみると結構外人が多く、カラフルな髪の人も多い。

…いや、髪については外人は関係ない気もするけどね。要はイラストの都合だと言わせんな恥ずかしい。

…まあ、前置きはこのくらいにしておこう。

さて、ここで問題です。

どうしてそんな女子の園と呼ばれる場所に、僕と弟は制服を纏って放り込まれているのでしょうか？

「…気まずい…ッ!!」

「…言っんじゃない一夏…！僕も結構ギリギリだから…!!」

そんな極限状態に放り込まれた僕の名前は、織斑零夏——いわ

ゆる『転生者』だ。

付け加えると、僕は織斑一夏の双子の兄として生まれてきた。いやはや、なんというテンプレっぷりだろうね？

主人公の兄って…できるだけ死亡フラグを立てないのが目標なのに、生まれた瞬間フラグまみれになってるじゃないか。何の罰ゲームなのさ。

このままだと一夏に巻き込まれて苦労したり、ひよっとすると主人公を押し付けられるんじゃないかと当時は思ったりもしたけど、じきにその不安は消えた。

だって、僕はISが『使えない』からね。

ちなみにこれは束さんのトコのISを触ってしつかりと確認した事実である。ふう、危ない危ない…ひよっとしたら使えるんじゃないかと思ってヒヤヒヤしたけど、これなら僕はどう頑張ってもIS学園に転入なんて事態にはならない！

「今思うとこれがフラグだったんだよなあ…」

「待ってくれ零夏！今お前に自分の世界に入られると俺は一人になっちゃうよ！！」

「知らんがな。現実逃避したいんなら予習でもしてなさい」

「その手があったかッ！！」

そんなわけで僕は気をよくしてセカンドライフを楽しんでいく…
筈だったんだけどね。一体何が起こったのかというと、

束さんに転生者ってバレた。

…いや、本当にどうしてあの人はあんなに頭がいいんだろうか。
僕の些細な仕草から『十二の試練^{ゴッホハント}』の特性を見抜いて、なおかつ
巧みな誘導尋問によって僕の口を滑らせるように仕向けるだなんて
芸当をサラッとやるなんて普通できないと思うんだけど。

これが天才の実力であろうか。くそう、頭がよくて羨ましい。

『いや、アレはれーくんがわかりやすかっただけじゃないかな?』

『やかましい。モノローグに割り込むんじゃないやありません』

「えー、慣性をキャンセルでP I Cがうんぬん…ん、零夏? 誰と話
してるんだ?」

「ウサギさん」

変な目で見てくる一夏はスルーしよう。僕がおかしくなったんじ
やなくて、本当にどこからか束さんの声が聞こえたんだから仕方な
い。

そんな風に、『束さんパネエエエエ!』と思いつつも、バレ
ては仕方ないので僕はある程度彼女に事情を話した。

『いや、要するに僕って平和に過ごしたいだけなんですよね』

『え? そんなに強いチカラがあるのに、れーくん何もしないの?』

『ええ。僕の夢は可愛い嫁さんに養ってもらうことですから』

『ふーん……ところで、それどう考えてもニートだよね!』

『ち、ちげーよ!』

確かこんな話をした気がする。今思うと酷い会話だなあ。

まあとにかく、僕としてはチートを自衛以外に使う気はない。お
まけに、どうせ何を言っても僕は『鎧』に守られているのでダメー

ジを貰うことは無い、という安心感もあった。

だから僕は束さんにサラッと

『世の中がどうなろうと、自分の周りが無事なら幸せなんですよ』
なーんて本音を喋ってみたわけさ。そしたら――

『そつかー。…やっぱり、れーくんは異常だね！束さんと同じくらい！ー！』

――とても嬉しそうに、彼女が笑ったのを覚えている。

「――皆さん、ご入学おめでとうございます！」
「…ん？」

おや、何時の間にか先生が来ていたようだ。

まだ回想終わってないんだけど…ま、とりあえず現実逃避ができたから良しとするべきかな。いくらBランク以下の攻撃無効とはいえ、精神へのプレッシャーまで緩和できるわけじゃないからね。さすがにずっと観察動物扱いされるのもキツいんだよ。

しーん…

ちなみに観察の視線は現在進行形で僕と一夏に向いている。その

せいで先生の爽やかな挨拶も女子一同はガン無視中。

あーあ、先生の顔が微笑のカタチで固まってるじゃないか。彼女もまた被害者の一人であることは間違い無いと思う。

先生正直すんませんでした、これは総て篠ノ之束って人のせいなんです。だが彼女は謝らない。

「た、担任の山田真耶です！皆さんよろしくお願いしますね！」

「……………（あれが世界初の男性操縦者なのね…）」

「……………（そしてもう一人が篠ノ之博士が直接目にかけてるっていう男の子）」

「……………（わたくしはどう動くべきでしょうか）」

「……………（一夏…）」

先生が頑張って二の句を告いでも、一同は華麗にスルー…あ、先生がもはや涙目だ。

なんというか、普通に申し訳ないのでここは助け舟を出すことにしよう。

えーと、とりあえず原作ネタでお茶を濁すかな？こういう時転生してるのって便利だ。…致命的に使い方が間違っている気がするけど。

「へえそうなんですかー。反対側から読んでも『ヤマダマヤ』なんですねー、アハハー（棒読み）」

「……！……」

「そ、そうなんですよ！先生昔随分からかわれちゃいましたっ！あ、せ、先生も自分のこと言いましたし、それでは生徒の皆さんも自己紹介もお願いします！」

やべえ棒読みすぎた。ふいー、危なかったぞ僕。一応なんとか先生も場の流れを取り戻せたように何よりだね。

『ありがとう！本当にありがとう！』と口パクで何度も僕に頷く先生。いや、美人に涙目の笑顔でお礼を言われるなんて嬉しいなあ。しかし先生、そんなに首を動かすと胸部の兵器が上下にぼいんぼいんして目の毒なので止めたほうがいいと思いますよ？

どうでもいいけど、巨乳はやはり人類の宝だと思う。どうでもいいけど。

「「「……………」」」

じーっ。

…しかし、今の行動の対価として一夏に向けられていた視線が一気に僕に切り替わった気がする…！早まったか…！！

「——です。よろしくお願いします…」

「はい、それでは次に、オルコットさん」

「ふふっ…わたくしの番ですわね？セシリア・オルコット、代表候補生ですわっ！」

そんなわけで、気を取り直して自己紹介。

現在ドヤ顔なのがイギリスの代表候補セシリア・オルコット、通称ちよろいさん。最初ツンツンだったのに一夏に一瞬でデレたあたりが名前の由来である。

僕の前世の知識通りなら、彼女はこれから一夏とケンカに遭ってヒロインの一人になるはずだ。なんというか、話の都合で彼女のデレるスピードは異常に早かった。

とはいえ彼女のフォローのために言わせてもらうと、これは一夏の女子を落とす技術のせいでもあると思う。隣で見てて思うけど、尋常じゃないモチっぷりだからね一夏も。

やれやれ、今まで何回あの朴念仁に女子がオトされたことやら…主人公つてのは本当に凄いと思う（いろんな意味で）。

でも正直、双子の兄（僕）を巻き込んだりするのは止めてほしい。

「——はい、それは次に…織斑一夏くん…弟のほうの織斑くんです、お願いします」

あ、次は一夏の番か。噂をすればだ。

なんととはなしに隣にいる一夏のほうを向いてみる（ちなみに僕と一夏の席は中央最前列だ）。このフラグ男はいつたいどんな自己紹介をするんだろうか？原作通りだと正直面白くないので何かしらのネタを期待したいところだ。

「……………かんは…によって…用化され……………」

…ん？独り言？

「？織斑くん？」

「おい、一夏？」

返事がない。どうしたんだろうか、と思い下を向いている一夏の
手元を覗き込んでみると、

「………… エネルギー系統の兵器と実弾兵器はやはり現在もほぼ同程
度の能力でありそれぞれの特性を理解して把握しておくことが必要
ぶつぶつぶつ…………」

「……………」

…一夏、まだ必死こいて予習してたのか。気づきなよ山田先生に。
どれだけ没入してるのさ。

本当に何やってるんだろこのバカは…まさか自己紹介以前にツ
ッコミ所を用意するとは思わなかった。多少僕のせいだけど。

まあ、とりあえず。

「姉さん、よろしくね」

「ここでは織斑先生と呼べ。さて——自己紹介くらい、ちゃんと
しろ馬鹿者」

ゴパン！

「つづがぶぶべばッ!？」

IS学園恒例・出席簿攻撃は無駄を生じぬ二段構えである。振り

下ろされた一撃と、机に顔をぶつける姿は非常に痛そうでした。いやー、僕はああいうのを防御できるチートを貰っておいてよかったよ。

「ち、千冬姉…！？なんでここに居るんだ！？」

「『織斑先生』だ。いいからさっさと自己紹介をしろ」

「ご、ごめんね織斑くん大丈夫…？い、いまクラスの皆で自己紹介してて、それで織斑くんの番が来たから、ね？」

「え、ええマジですかもう始まってたのか…！？ていうか、いきなりそんなことを言われても俺無理で」

「次は零夏に出席簿を持たせるぞ」

「それだけは勘弁して下さいッ！！織斑一夏ですよろしく願います…！！」

待つんだ2人とも。いくら僕の筋力が人類最強だからと言って、そのやり取りはやめてほしい。まるで僕が出席簿を持ったら一夏が死んでしまうかのようなリアクションじゃないか。本気でやればそうなるんだけども。

一夏が顔を青ざめさせてガタガタ震えているあたりがまた信憑性を与えているらしく、クラスメイトに『えっ、織斑（兄）くんってどんだけ怖い人なの！？』的な目で見られてるよ僕。

「さて…すまなかったな、山田先生。身内が迷惑をかけた」

「い、いえそんなことは！零夏くんのほうは、私にフオローもしてくれましたし…」

「ほう、そうか。まあ多少は本人のせいでもあるしな」

いえ、それは明らかにウサギさんのせいだと思います。

僕のぼっちフラグを立てつつ、しかし姉さんはこれを敢えてスル
ー……なんてこったい遊ばれている……！！圧倒的遊戯……！！

まあ、肉体的には僕のほうが強いから姉さんはたまにこのような
コミュニケーションを取るんだけどね。そういう所はやっぱ束さ
んと似ているんじゃないのかな？類は友を呼ぶというやつか。

「なら丁度いいな。零夏、お前も自己紹介しろ」

「えっ」

「丁度お前の順番だ、問題はないだろう？」

いやいや姉さん。物事にはタイミングっていうものがあるでしょ
う？ハードルを上げておいてそれはないと思うんだ。

抗議の視線を送ってみたが不敵な笑みで返された。ひよっとする
と束さんと同列に扱われた仕返しかもしれない。心を読むあたりも
似てるんだけどね。

え、えーと……しかし、どうすればいいんだろう？この状況。とり
あえず席を立ててみると一部の女子がビクッ！と動いた。なんか危
ない人扱いされてて悲しい。

「……えー、皆さんウサギさんのせいでご存知だと思いますが、織斑
零夏です。一夏とは双子で、僕が兄ですね。趣味は普通に漫画とか
読んでます」

とりあえず普通に自己紹介を言ってみたものの……や、やばい！」

とりあえずさっきの千冬様の発言について詳しく教えてください！
」
的な視線が痛い！！

こ、この後僕は何を言えいいのさ！？この状況で好きな食べ物とか言っても多分フオローにならない！しかしフオローしないとクラス内で危険人物扱いされる！

いくらチートがあってもこういう状況にはてんで弱い僕である。
仕方ないでしょ！前世はコミュ障だったんだよ僕！と、とにかく何かを言わなきゃマズイ——ええとアレだ！こういう時にはネタに走るか！？ネタって何を言えいいんだよもう！！

「なんだ、それだけか？お前にはもっと言つべき特徴があるだろう？」

「え？織斑先生、それはどういう……」

「山田先生も知っているはずだ。なにせ、とある馬鹿者が全国に堂々と放映したからな」

混乱している僕を見て、楽しそうに姉さんが言う。

いや、僕だつてソレを言えばフオローになることは分かってるよ！でもあんなこと自分の口から言いたくないってば！

「まあいい、なら私が言うだけだな」

「ちょっ……姉さん！？流石にその落とし方は酷くない！？」

「先生と呼べ。……さて諸君、君達の知っているが、コイツが私の弟であり、世界で2人目のIS男性操縦者であり、そして——」

「——世界初の、『形を持たないIS』の持ち主だ」

（いや、実はそれ嘘なんだよねー）

言うタイミングを完全に逃しちゃったけど、いつ説明できるんだろつか、これ。

L i f e 1 大嘘吐き、世に憚る（後書き）

説明回ですみません。

さつさと女の子と主人公を喋らせたいです。ヒロイン未定とは書きましたが精神年齢的にも年上組が絡ませやすいかも。特に山田先生と束さん。

チートが何なのかは次回詳細説明ッ！！

それと、まだ第一話なのに日刊ランキングに載っていました。ありがとうございます、これから宜しく願います。

L i f e 2 その魂、鋼鉄の如く（前書き）

この作品の原作はISです。

Life 2 その魂、鋼鉄の如く

大英雄ヘラクレス。

英雄としては抜群の知名度を誇っているその存在を、僕はとあるゲームの中で知った。

『——バーサーカーは、強いね』

生まれた瞬間から死を決定づけられた白い少女。

彼はその少女を主として現代に蘇り、とある『戦争』に挑むことになる。

しかし、彼はその肉体を強化するために、『狂戦士』という位階を与えられ、かつての人生でそうであったように——狂気の呪いを身に受けた。

絶大な力と共に、彼はまたもや理性を奪われたのだ。

結論から言ってしまうえば、それは恐らく失敗だった。

あるいは理性があれば、生死を共にした武器さえあれば、彼は敗北しなかったかもしれない。少女を守り、救えたかもしれない。泥にまみれて、黒く染まることもなかったかもしれない。

けれど。

——言葉はない。理性すらない。

——幾多の敵を屠った、無双の技術も振るえない。

それでも、彼は戦い続けた。

愚直なまでに戦うことしか知らず、幾多の試練が道を塞いでも——その身が滅びるまで、彼は決して止まらなかった。言葉がなくても、彼は確かに、その身の全てで語っていた。

——『少女を守る』、と。

その姿を、僕は心の底から尊敬する。

どれだけの苦難も、危険も、脅威も、傷も、死ですらも、全て彼は受け止めた。誰よりも死に近く、誰よりも死ぬことの恐ろしさを知っているのに、彼はそれでも戦い続けたのだ。

いやはや、真似できる気がしないよまったく……まあ、だからこそ彼は『英雄』なんだろうけど？僕は別にそんなものにならなくていい。

ならなくて、いいけれど。

——もし叶うなら。

ほんの少しだけでいいから、彼のようになってみたいと思ったんだ。

生前、数多くの試練を越えて、その分だけ彼の肉体は強くなっていた。

そして——すべての試練を越えた彼の肉体はついに、ひとつの『鎧』として成立するほどとなった。それから先、『神秘』を持ったその鎧は、多くの傷から彼を守り続けたという。

その神秘の名を——『^{ユットハン}十二の試練』、と呼ぶ。

『いや、この鎧がまた凄い性能でしてね。彼が越えた十二の試練の数だけ死んでも蘇生して、なおかつアツチの世界の定義でBランク以下の攻撃を無効化するんですよ』

『ふーん。なんていうか、れーくんは設定に酔いまくるタイプなんだね!』

『機械設定に酔いまくるアンタにだけは言われたくないわ!』

『あ、そういえばそうだね! いやあまたれーくんとの共通点を束さん見つけちゃったよ!』

『怒らせてよ! 開き直られると僕どうすりゃいいのさ!』

なーんて会話を束さんとしていた僕だったりする。

転生をぶつちやけた以降、僕は妙に束さんに懐かれた。

あの時を境に、突然ふらりとやってきて、れーくんのこと教えてーだの一緒に寝ようよーとか言われながら抱きつかれるだのされるようになったんだよね。ちなみに僕が断ると姉さんのところに行つて抱きつき、アイアンクローを食らつてまた僕のところに戻ってくる。無限ループって怖くない？

…これが一夏なら何も気付かずに対応するんだろうけど、僕はそこまでニブチンじゃないので『あれ？なんか妙なフラグ立てちゃった？』とか思つたよ。まあでも、どうも無害っぽいので当時は放置することにしちゃつたんだ。

どうせ『十二の試練』^{ゴッドハンド}があるから物理的には大丈夫だし、いざとなったら姉さんを頼ればいいやーとか思つてたんだよね。

…今思うと、この選択がそもそも間違つていた。『おっぱい柔らかいぜイヤッホウ！』とか考えてた当時の僕を宝具で三回くらいブツ殺してやりたい。

そんなわけでグダグダに過ごしていた僕の運命が動いたのはその随分後、一夏がISを起動させちゃった時である。

「そう、それですよお兄さま！私たちはその話が一番聞きたいんですッ！」

「さあさあキリキリ吐いちゃいましょうよ！！」

「いやいや君達急に態度変わったね！その変わり身に驚きを隠せないよ！！」

「アハハ、大人気だな零夏！」

「黙れ小僧！」

自分に対する視線の量が減ったからって僕を煽るんじゃない一夏！なんなら姉さんに出席簿を借りてきても——あ、ごめん冗談だから。そんなにガタガタされると僕もマジでへこむからやめて欲しい。

——さて、現在は休み時間である。

姉さんのぶっちゃけトークの直後ということもあり、僕のもとにはクラスメイトが殺到して質問攻めに遭っている状況だ。

さっきまで危険人物扱いしてたのに…好奇心にはやはり勝てないということなのだろうか？いやまあ勿論ああいう目で見られるよりはマシだけどね…

「で、お兄さま！そもそも篠ノ之博士とはどういう関係なんですか！？」

「いや普通に近所のお姉さんみたいな感じだけど…というか『お兄さま』って何さ」

「いや、なんだか織斑くんって年上オーラが漂ってきますからつい…そういうところは千冬様にけっこう似てますよね？」

「確かにそれは良く言われるけれどその呼び方はどうなのさ…」

転生者だからね。精神年齢が上なのは事実だからそう思われるのも仕方ない。加えて、ヘラクレスの能力のせいで身体はしっかり筋肉ついてるのも年上扱いされる要因なんだろうなあ。

…でもさ、流石に僕もクラスメイトに『お兄さま』なんて呼ばれることになるとは思わなかったよ。

これが弾あたりに知られたら僕はマジギレされて殴りかかれるかもしれない。効かないけど。

「とはいえ同じ年なんだから別に敬語なんていらないよ？」

「い、いえっ！と、特に意味があるわけではないのでお気になさらずッ！！」

「偉い人は言いました！『LESSON 4 敬意を払え』と！」

「漫画じゃん！というか君達やつぱり怖がってるよね僕のこと！？」

「ひいっ！？ご、ごめんなさいいいい！！」

「なんか反応がガチですごい傷つくよ！どうしてこうなった！！」

「ま、まあ落ち着けて皆。零夏は確かに異常な強さだけど、それは束さんのISのせいだって知ってるだろ？」

流石に引け目を感じたのか、一夏が空気を読んでフォローを入れてくる。

確かに僕がドン引きされた原因のひとつは一夏のリアクションなわけだけど——でもそれ、ISのせいじゃないんだよ一夏。

「あ、ああそうそう『形のないIS』についても聞きたかったんですよお兄さん！」

「織斑（弟）くんのリアクションは、『こっそりISを起動して攻撃できるから』なんですよね！？決して素で頭を吹き飛ばせる能力を持つてるわけじゃないですよね！？」

「え、えーと…うん、そういうことになる…ね？」

「…「良かったあああああ…！！」「」「」」

…実は頭を吹っ飛ばすどころか、衝撃波で全身をバラバラにするくらいの力は持つてるんだけど、この流れだと真実がものすごく言いづらい。ごめんなさい、今僕はウソをつきました。

はあ、まいったなあ…こうして僕は束さんの策略にハマッていくのか…これだと誤解を解こうにも解けないじゃないか。そもそも、束さんがあいう真似をするから僕が色々勘違いされることになったんだよ。

うん、折角だからその時の様子を思い返してみよう。はい回想シーンはこちら。

『結局、一夏はISを起動したけど僕はなーんもなかったなあ…よかったよかった』

『やれやれ、薄情なことだな。弟がISを起動させたというのに』
『むしろ向き合い方を変えないところを褒めてほしいよ姉さん。…あー、平和なメシは美味しいなあ』

——その時僕は、僕はお菓子を食べながら自宅の居間でグダグダしてる最中だった。

ちなみに一人ではなく、たまたま休日だった姉さんも寝転びながら酒を飲んでいるところである。

『ブリュンヒルデが酒を飲む』とか書くと絵画のワンシーンのよう

に聞こえるけど、実際飲んでるのは缶ビール…一気に俗っぽくなつたね。仕方ないね。

『落ち着いたものだ…お前はまさか、束から何か聞いてたんじゃないだろうな？』

『あつはつは、それは無いって。というか聞いてもわからないですよどうせ…って姉さん、僕のポテチ取らないでよ』

『このくらいはいいだろう、たかだか一枚だ…というか、相変わらず食う量が多すぎないかお前は』

『姉さんこそビール七本目は多すぎるんじゃないかな？』

『ここのところ忙しかったからな。今日一日はゆっくりさせる』

『まあ、IS学園の教師なら仕方ないか…まったく、いつあんなところに就職してたのやら』

あ、ちなみに僕は身体の都合かやけに大食らいな体質である。漫画とかでよく大食いキャラがメシ屋を荒らしたりするけど、まさか自分でやるとは思ってもみなかったね。

今もポテチ（大型）を三袋目を開けたところだ。ちなみに飲み物は普通にコーラだけど、これも2リットルの3本目。それなのに特に太る様子もなさそうなので世の女子を敵に回しそうだ。

『…いやーしかし、のんびりするのはやっぱいいね』

チートなんて使わないに限るよ。色々バレたりこつそり使ったりしたことあったけど、人生危険とは無縁なところでゆっくりしているのが一番さ。こうして姉と寝転び無駄な時間を過ごすことは非常に幸せなことだ。平和万歳。

そつえば、今頃一夏はどうしてるかな？そろそろアイツは家に

帰ってこれるんかねえ…あ、ニュース見ればすぐわかるか。何しろ最近『世界初の男性IS操縦者』で持ちきりだからねえ。

姉さん、TVつけてー。え、面倒だから自分でやれ？なんだよケチだなあ…まあいいか、リモコンリモコンっと。

ピッ

『【いえーいちーちゃん！篝ちゃん見てるー！？織斑零夏ー！通称れーくん見てるかーい！！】』
『ぶふウツツ——！？』

——思わずコーラ吹いた僕を許してほしい。

脈絡もなく突然TVに知り合いが映ったら貴女はどう思いますか？それがたとえ世界を変えた天才であっても、僕なら正直超ビックリすると思います。というか今まさに驚愕の最中だ。

『ゲホガホ…た、束さん！？』

『……零夏、TVを今すぐ消せ。今日は休日だからな』

『え、スルーすんのこれを！？』

『【おっと待ったちーちゃんその扱いはないと思うな！わざわざTVの全チャンネルをハックした束さんの手腕を褒めるところだよここは！！】』

『アンタ今リアルタイムでここを見てるだろ！ナゼミテルンデス！？』

って待て！今さりげなく束さんがとんでもないこと言っただよね！
これ今全国で放映されてるのかよ！僕の名前も思いつきり今放映中
なの！？

高校受験も無事に終わらせて平和を満喫してたのに何をやらせる
気さー！あ、ちなみに学費の安いところをサクッと推薦で通りまし
た。みんな、勉強しておくのは大事だぜ。

やばい、なんか脳内がちよつとづつ現実逃避を始めている。嫌な
予感しかないよ…！僕の前世までの経験やら英雄の危機察知能力
が叫びまくってるよちくしょう！

『そんなわけで僕はTVを消すぞジョジョオー！ってあれ、消えな
いし！なんで！？』

『ふっふっふ。れーくん甘いね！束さんの魔の手から絶対に逃れ
られないよ！』

『アンタうちの家庭に何か色々仕込みまくってるだろう！というか
さつきから微妙に危ないネタ混ぜるのやめなさい女の子なんだから
！！』

『…何をする気だ束…ここまで大掛かりな真似をしている時点で、
既に色々問題は出ているだろう』

『ぶー。束さんは悪くないよ？そもそもこんな真似をしたのはい
つまでたつてもれーくんがノーリアクションだったのが原因だもん
』

『？一体何を言って…』

『【さーて世界中の皆さん束さんのニュース速報だよ！なんといっ

くんの兄さんのねーくんもISに乗れることが判明しました！！】

『

えっ。

いや、乗れませんが。

『【いやーあの時はビックリしたね！なぜか束さんの極秘開発してたISに適合したんだよ！せっかくだからどーんとそのままプレゼント——】』

そんなものを貰った覚えは無い…というか、束さんの言いたいことがわかりかけてきたぞ？

彼女はどうかやら、僕のことをIS操縦者の仕立て上げたらしい。…いやいや、やめてよ！束さんのことだからIS学園に放りこんだら面白そうだなーとか考えてるんだろうけど僕バトル展開とかダメなんだってば！

は、いや待て。冷静に考えると僕がISを使えないのは本当だし、何か言われてもラファールだの打鉄だのを触って『ほら動かないでしょ？』とか言えればいいだけ——

『【——したのがかれこれ数年前だよ！凄いでしょ！ねーくん！バレーに色々仕込んだ束さんの手際をほめてほめて！】』

『アンタ何やってんだああああああ！！？』

『【いやはや、束さんもいい仕事をしたよ！あ、ちなみに絶対安全なようにねーくん以外には起動できないようにしておいたから！まあそのせいで他のISに反応しない変なバグが出たけどたぶん大丈夫なんじゃないかな！！】』

『開発者のくせに何故そんなに適当なんだ…』

それはね姉さん、そもそも僕的能力はISじゃないからさ。興味が無いからたぶん投げっぱなしなんだろう。そもそも作り話だし。…というかこれ、完全に逃げ道が塞がれているんじゃないか！？

『…おい、零夏。とりあえず持ち物を確かめろ、今の話が本当なら待機形態のISがあるはずだ』

『【ああ、ダメだよちーちゃん。その方法じゃ見つからないから】』
『なに…？』

『【なにせそのISは——世界初、形のないIS】なんだからね！！！！』』

とまあ、これがTVで壮大に放映された内容である。

篠ノ之博士直々にTVをジャックして発表された内容だけにかなりの信憑性だったらしく、その後僕はなんやかんやで日本政府に呼ばれ↓IS学園に転入のコンボを食らってしまったのであった。

くそう、あの時点ではまだフォローができた範囲だったのに…学園の転入試験でつい相手をボコしてしまったのが間違いだったんだ…！

「とはいえ、そのISの詳細はぜんぜん説明されてないよな」

「あー、そういえばそうだねえ」

そもそも一夏も僕のことを知ったのはごく最近だし、戦闘シーンを見たのは姉さんと一部の相手だけだ。詳細に至っては束さんです

ら完全には知らない。まさしく謎に包まれたISに見えているに違いない。

「ねえねえ、よかつたら教えてくれませんか？クラスメイトのよしみということぞ！」

「えー、あー…？どうしようかなあ」

「えー、勿体ぶらずにささっと教えて——」

と、名も知らないクラスメイトが僕を急かそうとした瞬間——

「——ちよつと、いいか？」

「——ちよつと、よろしくて？」

「「え？」」

2人の少女の声が重なった。

僕と一夏がその声のする方を向いてみると、

——黒髪の少女が、一夏のもとに。

——金髪の少女が、僕のもとに。

様々な想いをその胸に込めて、目の前に立っていた。

かくして、物語は始まる。

しかし、それが台本通りに進むかどうかは、まだ誰も知らない。

L i f e 2 その魂、鋼鉄の如く（後書き）

ヒャッハア！何故ランキング五位とかに乗ってるんですね！プレッシャーで潰れる！潰れる！

いやはや予想外の評価に驚きですね。皆さんありがとうございます！

本文のうんちく。

英雄ヘラクレスはゼウス神さんとその愛人的な人（？）との子なのですが、ゼウス神の奥さんであるヘーラーさんという方はヘラクレスを酷く憎んだそうです。

ヘラクレスが狂気に満ちたのはこのヘーラーさんが吹き込んだせいのようなですね。F a t eの本編を考えるとなんとも皮肉なものです。ぶっちゃけヘラクレスって狂気が無ければマジで対抗できるのは本気のギルくらいしか居ないそうです。気の毒に…

L i f e 3 乗り手の矜持、彼の者知らず（前書き）

セシリアさんとダベツてたら終わってしまった…

このままだとアレなのでこの後L i f e 4を連続投稿します。

しばらく後で、しかも短めになると思いますがお待ちください。

L i f e 3 乗り手の矜持、彼の者知らず

セシリア・オルコットの気分を一言で表すなら、彼女はひどく不満だった。

ISが開発されてからの十年で、世界がその形を変えたことは記憶に新しい。

その中で最も顕著な変化は、男性の地位が下がり、女性の地位が上昇したことにより女尊男卑となったことだろう。街の一角で女性が男性を使い走りに使う程度のことは、今では世界中に溢れてしまっている。

——記憶に蘇るのは、ただ母の言うことを聞くことしかなかった父の姿。

セシリアにとって男というものは、自分の意志すら表に出せない情けない存在でしかなかった。

プライドもなく、全てを諦めてしまっている姿はとても、とても彼女には我慢できないもので、いつしか彼女は男性というものが心底嫌いになった。

だから、自分はああはなるまいと彼女は努力を重ね——ついには、イギリスの代表候補生にまで成長する。

家族の名に恥じないように。

自分の誇りを裏切らないために。

そして、彼女はまだ歩みを止めることはない。

(わたくしは、もっと、もっと——強くなります)

—— あんな『弱い』男達とは違うのだと、証明するために。

それが変わったのはごく最近のことだ。

世界初のIS男性操縦者の登場——それを聞いて、世界の誰もが驚いた。

セシリアもそれは変わらない。しかし他と違う、代表候補生という立場の彼女は、こうも思ったのだ。

—— ひょっとしたら、その男は、自分が知らない『強い男』なのかもしれない。

そんなかな希望はしかし、数日後にとあるニュースで揺れ動くことになる。

『形のないIS』を動かした、とある少年の登場によって。

「頑張るんだモッピー！僕は君のことを全力で応援してるぞっ！！」
「その名で呼ぶなこの馬鹿者があああつ！！」
「貴方、わたくしのお話を聞く気がありますのおおおおおおッ！！？」

やあ、ようこそIS学園へ。この出席簿はサービスだから落ち着いて受け取って欲しい。

うん、すまない。メインヒロインの出番は『カット』なんだ。謝って許してもらえとは思ってない。でも、確かに彼女はここに居てしっかりと一夏をイベントをこなしているからそこは安心してほしい。

彼女の魅力を知りたいなら原作を読もう。じゃあ、この叫んでる子に意識を戻そうか。

なーんてメタ発言満載のことを思いながら、僕は今こめかみに青筋を立てながらこつちを睨んでいる金髪さんの方に向き直る。

え、結局箒ちゃんはどうしたのかって？今一夏と屋上行っちゃったよ？束さんのこともあつてか僕はあの子にあんまり好かれていないだよねー。

だからまあ、とりあえず一夏とのアイコンタクトによる協議の結果、オルコットさんのことは僕が引き受けて、一夏には箒ちゃんを任せることにした。

どうせ次の時間には一夏もオルコットさんに色々言ったり言われたりするんだ、これくらいが妥当だろう。しかし一夏は休み時間ごとにフラグを立てる作業を行ってるなあ…

「（……ビキビキッ！）」

と、いい加減オルコットさんが僕に殴りかかってきそうなので謝っておくことにしよう。流石に三分ぐらいスルーし続けていたらこくなるよね。

「いやあ、ごめんねオルコットさん無視しちゃって。あの子とは数年ぶりに会ったからさ、挨拶くらいはしておこうと思って」

「明らかに彼女を煽るためだけにやってましたわよねえ！？人が真面目な話をしようとしている時にそんな態度を取って恥ずかしくないんですの！？」

と、言われまして。

この後一夏に『この私と話せて光栄だと思いませんの！？』とか言う人が言えるセリフじゃないよねえそれ。女尊男卑とはいえモラルの問題は大事だと思うよオルコットさん。まあ、僕がそんなこと言えた義理じゃないんだけど。

…それにしてもこの子、からかうと非常に面白いな。今後ともちよくちよく遊ぶのもいいかもしれない。レイカは楽しそうだといやつちゃうんだ。レイカ知ってるよ、セシリアはちよろくてえろい女子なんだってこと。

「この…ッ…ふ、ふう。まあいいですわ、それよりも貴方には聞きたいことがありますもの」

「ん、なんだい？」

「本当は織斑一夏のほうにも聞いておきたかったですけど——」

おや、切り替えの早さは流石代表候補生と言ったところだろうか。まあ煽ったのは僕なんだけどね。正直すまんかった。

ほら、僕って精神年齢が上だからさ、年下で遊びたくなることがたまにあるんだよ。姉さんも束さんもよくやるアレさ。これはたまにバカやりたくなる病気みたいなものだからね、仕方ないね。

そんなくだらないことを考えていた思考は、彼女の次の言葉で一気に冷却されることになった。

「——貴方にとって、ISとは何ですか？」

その質問は、僕にとって避けられない言葉だったと思う。

『形のないIS』について、周囲に知られている情報はあまりにも少ないが——それを全て並べるならば、以下の通りになる。

ひとつ——そのISには、形がない。

装甲はない。それどころか、待機形態すら存在しない。ISに存在する様々な出力装置を小型化したのか、透明にしたのか、はたまた肉体の中に仕込んだのか、『それら全てが一切不明』であり、防御は全て不可視のエネルギーシールド——すなわち、『絶対防御』のみで行う。

故に、パッケージの換装や、武装の変更などは不可能。今の世界で主流となる『あらゆる目的に適応する』ことに真っ向から逆らう、『最強の一』を求めたIS。

ひとつ——そのISは、飛行能力を持たない。

他の全てのISが持っている、空を、宇宙を飛ぶための翼が、それには無い。

宇宙空間での使用を前提にしているはずなのに、その機能をオミットし——その代わりに、他の全ての現行機を超越する出力を持つIS。

ひとつ——そのISは取り外せない。

すなわち、調査不能、解析不能、そして制御不能なIS。

その機体を使えるのはただ一人だけ。すなわち——この僕、織斑零夏『のみ』にしか扱えないのである。

…とまあ、これらが僕の能力の概要。

そういうわけで、これらの力を持っている僕の背中には、とんでもない責任がのしかかっているわけだ。

『形のないIS』を持つていることの異常性はそれだけでは済まない。なにせ隠密製に特化しているのにパワー最強、現行ISとは別ベクトルで集約された技術力。どれも価値があるというだけの一言では済ませられないレベルだ。

おまけにこのISは東さんお手製の『どの国にも所属していない』機体ということになっているので法的な拘束も難しく、同時に、あらゆる国が引き入れることに躍起になっている存在でもある。

だから、僕はいつか問われるだろうと思っていた。

——ただの1学生のお前が何故、いきなりそんな力を手に入れられるんだ。

お前は、我々の努力をなんだと思っているんだ、と。

「…なんで、そんなことを聞くんだい？」

「わたくしは、代表候補生ですから」

思考に区切りをつける。

とりあえず、彼女の質問に回答するには保留して、こちらからも問い返して情報を得ることにしよう。質問を質問で返すのはよくないがまあ仕方がない。

「代表候補生というのは、そう簡単になれるものではありませんでした。座学も、実習も、実戦も…わたくしは他人よりも努力して、だからこそ今の居場所に居ます」

「だから、いきなり専用機を渡された僕が気に入らないと？」

「それもあります…正直な話、貴方と織斑一夏はモルモットのようなものでもあります。それだけならばわたくしもこんなことを聞きはしません」

オルコットさんの真面目な雰囲気を感じてか、周りのクラスメイ

トは沈黙を保ったままだ。空気が張りつめて少し息苦しい中、僕と彼女は会話を続ける。

…モルモット、というのは確かにそうだ。力を手にするかわりに、他人からの視線は否応なく突き刺さってくる。何かを得るためには同等の対価が必要だ、というのはある程度確信を突いた言葉ではあるよね。

無言で先を促す僕に、彼女は問う。女性として、代表候補生として、IS操縦者という努力をした者の代表として、僕に言う。

「わたくしが聞きたいのは——貴方達のISは結局、篠ノ之博士の都合で『渡された』ものでしかないのではないか、ということですよ」

それが彼女の不満の理由だった。

東さんの都合。そう考えるのは大勢の人にとって極めて自然な流れだ。

ISの『製作者』——篠ノ之束。

世界最強の『ブリュンヒルデ』——織斑千冬。

世界初の男性操縦者——織斑一夏。

僕のまわりには、こんなにもISの重要人物が溢れている。故に、あらゆる人が思っただろう。織斑零夏は、ひよっとしたら織斑一夏も、

篠ノ之束に『選ばれたから』ISに乗れたのではないかと。

彼女が求めているのは強い男性だ。だから、こんなにも『都合よく』織斑の関係者だけがISに乗ることができているのが気に入らない。

ひょっとしたら、僕達はただのエコ贖罪でISに乗れているだけではないのか？

結局は強い男性など居らず、ただ女性に力を与えられているだけではないのか？

そう、彼女は『不満』を…あるいは『不安』を抱いている、ということだろう。

「そこでISをどう思っているか、に戻るわけだね」
「…そうですわ」

何を思っているか。どう受けとめているか。力が手に入ったと喜んでいいのか、こんなものは必要ないと憤っているのか。

そんな僕の様子から、彼女は男性というものがどういうものなのかを推し量ろうとしているのだろう。

はてさて。一体僕はこの問いにどう返すべきなんだろうね？

様々な回答が脳裏に浮かんでくる。僕はそこから自分の選ぶべき言葉を捜そうとして——やめた。

…考えるまでもないことだったね。

「身体の一部だよ」

「…え？な、なんですって？」

「意味がわからないだろう？ああ、これはISのことを大切に思っているわけじゃない。正真正銘、僕にとって『これ』は『身体の一部』でしかないんだよ」

「な——何を言ってるんですの、貴方は！？ISには自己進化を促すコアが搭載されています、そんなことすら知りませんの！？」

知っているさ、そんなことは。

だからこそ、僕はこう答えているんだから。

「…『これ』を君たちがどう捉えているかなんて僕にわかるわけがない。だってそもそも、僕にとっての『IS』と君たちにとっての『IS』は別のものなんだから」

「そ、それはどういう意味ですの！？」

「説明してもわからないさ。僕が君の言葉をわからないようにね」「な、何を…」

僕が返すべき回答。それは——

……。

——そんなもの、あるわけが無いッ！

大体、束さんの大嘘を信じているオルコットさんの真面目な話を、僕が真面目に返していいはずもないだろうに。そもそも、僕はISに乗れないんだからそんな文句を言われるのはお門違いだよ！

そういうのは『本当にISに乗れる奴』に言うべき文句でしょうに。僕は違います、人違いです！

噂でバカにされるくらいは我慢してあげるから、君は本当に文句を言つべき相手に言えればいいんだ。

「だけどもあ、君の文句も一応スジが通ってるから、ヒントくらいはあげよう」

「ちよっとお待ちになりなさい！話はまだ終わって——」

「一夏と向き合えば、答えは出るよ」

「！！」

そう、考えるまでもない話なんだ。

ヒロインには主人公を当てればいいだけの話さ。

ISの誇りとか僕は知らないよそんなこと。『英雄』の誇りの話なら真面目に対応するけど、男の操縦者うんぬんな話題に関しては全部一夏に言いなさい。どうしても僕に文句が言いたいなら束さんを連れてきて一緒に怒るべきだね！

というわけで、僕は彼女の怒りを全部一夏に丸投げすることにした。うん、それが妥当なことだと思う。そもそも、僕は本来いないはずなんだから、このくらい許されるだろう。多分。

だから、僕は彼女に言ってやる。

「君に答えを出すのは僕の役目じゃない。一夏の役目だよ」

そう、彼女に告げた瞬間。

キーンコーンカーンコーン。

「「あ」」

かつこよく決め台詞を発した瞬間にチャイムが鳴った。なんという狙ったようなタイミングだろうか。いやはや、チャイムとセリフがかぶったら僕恥ずかしすぎて死んでたね。厨二病とかいうレベル

じゃなかったよ。

今の音で硬直が解けたのか、わたたとクラスメイトが座席に戻っていく。次の授業の準備もしておかないと出席簿が飛んでくるだろうからねえ。教材がめっちゃ厚いのもあって面倒だね、仕方ないね。

「く、この…っ！あ、後で弟さんと一緒にまたお話を伺いますからねっ…！」

そう言い残してオルコットさんは去っていった。

ああ、申し訳ないけど僕、次の休み時間は男子トイレ搜索の旅に出なきゃいけないからその要望には応えられそうにないや。実は原作で『男子トイレないんじゃない？』疑惑があったから割とマジで探しておかないとやばい。

…っていうか、あるよね？男子2人になったしトイレくらいあるよね？用務員のおじさんも居るらしいし、頼むからあると言ってくれ——ッ！！

「ん、どうしたんだ零夏？へんな顔して」

ちなみにその後、どうやらよっぽど焦っていたらしく、戻ってきた一夏にそんなことを言われてしまった。はっはっは、一夏も気付いたら似たような顔になるぞ。

L i f e 3 乗り手の矜持、彼の者知らず（後書き）

本文を見返すとただかつこいいだけの空気を匂わせていたアホだったので修正しました。

補足しますと、

そもそも零夏は文中で言っている通りISには乗れません。

故に、嘘のせいで自分が色々言われているのことに對して、なんでわざわざ自分が返答する必要があるんだ、と彼は考えています。

また同時に、ウソを自分で受け入れて彼女の望むような回答を出すことも不誠実だというのが零夏の思考ですね。

という事を書いていたつもりが、訂正前はただのかつこ良い空気を出しているだけのアホでした。作者の顔は真っ赤です。

こつという点からさりげなく、『IS』と零夏の『異能』には決定的な断絶が広がってるんだ、なーんてことをアピールしてみたり。

さて、次のあとがきでは忘れそうなので書いておきますが、僕はリアル生活の方では風邪をひいてしまいました。

皆さんも体調管理にはお気をつけてください。寒いのはヤバいです。さて、その分を取り戻すためにも次を書くぞー。

L i f e 4 凡人の心、英雄の魂（前書き）

前話を修正しました。

色々ミスがあったのです… なんかというか、自分の伝えようとしていたことが書いてみると意味不明なことってよくありますよね…

というか短いはずだったのに過去最長だよ！ 一体どういうことなんだ！ もう朝チュンの音が聞こえてるわ！

推敲は申し訳ありませんが昼頃になると思います… 誤字や意味不明な部分等あったらすみません。

L i f e 4 凡人の心、英雄の魂

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

時は流れて、現在三時間目の頭である。

結局次の休み時間をトイレ搜索に費やした僕は、教室に帰ってからオルコットさんにキツ！と睨みつけられるという流れを経て座席に座っていた。あ、ちなみにトイレはきちんと見つかりました。よかったよかった。

実は二時間目、山田先生がぼろつと『ISはブラジャーに関連してますよね』なんて話をして、またもやクラスメイトの視線を釘付けにした事件等があったけど割愛させてもらうよ。原作通りだったし。

ちなみに僕の目は恥ずかしがって胸を押さえた山田先生の、寄せて上げられた巨乳に釘付けでした。男だもの仕方ないでしょう。その後姉さんに出席簿攻撃を食らったけど、僕に悔いは無い。痛くないし。

「クラス対抗戦とか代表つて、要するにそのまんまの意味ですよね？」

「ああ、そうだ。付け加えるなら、代表者は今後もクラス長扱いで一年間は変更無しになる」

で、今の状況は姉さんの思い出するような発言に対して一夏が手を上げ、それに姉さんが応えたところである。

いやーそれにしてもすごいよ一夏、原作より頭いいね！原作だと

代表候補生の意味もわかってなかったからね！これもHRでの現実逃避のおかげだろうか。

ちなみに蛇足だが、一夏はやっぱ間違えて必読の教材を捨てたので、僕のを代わりに貸した。でも結局全部をきっちり覚えることはできなかったみたいで姉さんの愛の出席簿は無情にも振り下ろされたのだった。

ん、僕？束さんとISと魔術・魔法についての熱い設定の語り合いをした時にけっこう覚えたから必要なかったよ。やっぱりあいう会話って楽しいよね！でも他人に迷惑かけちゃダメだぞ！

それにしても、クラス長か！。

こういうのって僕の前世ではあんまし立候補とか無かったな！。で、仕方ないからクジ引きで決めて最後に残ったやつががつくりと肩を落とす、っていうのがテンプレだったよ。

小学校ではけっこう立候補する人が居たんだけど、思春期で色々気恥ずかしくなるからかな？

IS学園ではどうなんだろうね。高校というのもあるけど、この学園本来に外人が多いから他のクラスでは立候補とかも多いのかもしれない。まあ、一組では無理だけどね。原作通りの流れなら、ここのタイミングで――

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

ほらきた。まあそりゃ、学園唯一の男子だし、こうなるのは仕方ないな。一夏頑張れ。

「はい、織斑くんがいいと思います！」

「わたしも織斑くんがいいかと！」

「わ、私は織斑くんがいいです!!」

…多いなあ、推薦。

流石ハーレム男だ、何時の間にそんな人気を獲得していたんだか。もうアレか、身体から女子を惹きつけるフェロモンが出てる疑惑が浮上するレベルだよこれ。

そんな風に考えて…いや、『現実逃避』していた僕の思考は、

「では、候補者は織斑兄弟ということで構わんな」

「ちよつと待った」

姉さんの台詞で一氣に現実に取り戻された。

うん、ほんとにちよつと待った。貴方が何を言っているのかわからないよ姉さん。ここはしっかりと間違いを指摘しておかなければならないね。すうー、と息を吸って、

「何言ってるんですか先生！織斑って言ったら僕の右に座っているこの朴念仁のことに決まってるでしょう！？僕のことを巻き込むのはやめてくださいよ!!」

「何言ってるんだよ先生！織斑って言ったら俺の左に座っているこの人間プレス機に決まってるでしょう！？俺のことを巻き込むのはやめてくださいよ!!」

.....。

「お前がやれエエエエエー!!!」

「黙れ貴様ら」

スパパァン！と姉さんの手が恐ろしい速度で動き、僕と一夏の頭を強打した。うがぁ！いつ…！たくないけど凄まじい衝撃が頭にツ！というか僕と一夏の2人を叩いたはずなのに音がほぼ重なって聞こえたぞ！姉さん、ひよつとするとIS乗れば燕返しとかできるんじゃないだろうか。相変わらず凄まじいスベックの姉である。

それはともかく、今の一撃でなんとか頭は冷えた。つまり…

…どういうことだってばよ？いかん！まだ混乱してるぞ落ち着け僕！

「うごがぁ…お、織斑先生…！どういうことなんだよこれは…!!」

「どうもこうもあるか。女子の視線と意識は明らかに均等にお前らの方に向いているぞ」

「なんでツ!？」

驚愕する一夏。かくいう僕もビツクリだよ。

あたりを見渡してみると、確かに女子の視線が僕と一夏、それぞれ丁度半々くらいに集中していた。中には手を挙げたままで指をこっちに指しながらキラキラした目を向けている子までいる始末だ。

って、いやいやいや！一夏はともかくなんで僕にまで代表の推薦が来るのさ！？別に僕はたいしてイケメンでもないし、むしろ女子には最初怖がられてたくらいだったのに。

とりあえず後ろを向いてクラスメイトに聞いてみる。え、えーと、君たち？僕を推薦した理由はなに？

「お兄さまってすつごく頼りになりそうな空気を纏ってますから！」
「なんというか、大樹というか鋼鉄というか…寄りかかっても揺るがないというか」

「さつきオルコットさんと話してたときの、面倒そうではあるけど優しげな横顔が…」

「いやいや、そんな空気だけで言われても困るよ！多分それチートのせいだよ！あと最後の人、アレは一夏に責任を丸投げしただけなんだよ！？もつとそういうヘタレの部分に注目してよ！」

「え、ええい！どうもクラスの皆さんは男子に対する線引きがまだしっかりしてないぞ！僕は弟とは違いますが、そういうのは全部一夏に頼んでよ君たち！」

「え、ちよつと待っていていや俺はなんで推薦されて——」

「黙れこのイケメンリア充野郎！」

「零夏ああ！！せめて俺の疑問くらい解消させるよッ！」

君の理由はもういろいろとお腹いっぱいだから喋らなくていいです。とりあえずもげろ。

ちなみに、僕の台詞を聞いてクラスメイトの一部、具体的に言うとかポニーテールの和風女子さんがうんうんと同意するように頷いていた。

篤ちゃん、ちなみに言葉のどこに納得したんだい？それ多分僕のことと同じだよ。君は嫌がるかもしれないけど、一夏のどうしようもなさについては一度2人で話し合うべきかもしれないね。

と、教室が喧騒に包まれ、姉さんがため息をつきながら出席簿を持ち上げた瞬間――

「――納得がいきませんわっ！」

バンツ！という音と共に、金髪少女――オルコットさんが立ち上がった。

「そのような選出は認められません！その人の話を聞かないヘタレ男と野猿のような野蛮男の2人が揃って代表だなんて、このセシリア・オルコットが許しませんわ！」

僕等を指差して、オルコットさんは叫ぶ。

…あの怒りようからすると、適当に話を誤魔化して終わらせたのがそろそろバレたに違いない。はっはっは、まあ冷静に考えると一夏に丸投げしただけだからね。でもこれで騙されちゃうからちよいいさんなんて言われちゃうんじゃないかなあ。

とはいえ、今の発言はナイスだ、と僕は隣の一夏を見ながら思う。不快げに眉をしかめている様子を見れば、一夏がそのうちポロツと本音を出すのは確実だ。いいぞオルコットさんもつとやれ！

そして、一夏が挑発に乗って思いつきり自爆しようと、僕は彼女の言葉に反応しなければそれで戦う流れはスルーできる。完璧じゃないか…！（フラグ）あとは一夏が適当に目立って僕は地味に振舞っていればそのまま一夏がクラス代表になるだろう。間違いない！（フラグ）

「――としても後進的な国にいること事態、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

「イギリスだつてたいしてお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ…なんですってえ!？」

などと考えている間に一夏がやらかしていたようだ。原作通りとはいえ本当に口が軽い男である。とはいえよくやった!僕のことなんか忘れてそのまま犠牲になってしまえ!

…でもね2人とも、悪口を言い合うならせめてお互いのことを言うべきだと思うよ?国レベルで言い合うって色々情けないだろ?まあ、お互い容姿が整ってるから悪口言いづらいのもあるんだろうけど。

よし、これは後でちゃんと一夏に言っておこう、なんて思っている間に、あれよあれよと会話は進み——「決闘ですわ!」「おう、いいぜ」「ハンデはいるのか?」「わたくしを馬鹿にしすぎですわ!」——2人の模擬戦が行われることが決定した。

パンパン、と姉さんが手を叩いて場のまとめに入る。

「話はついたようだな」

やれやれ、危ないところだった。これで一応の区切りがついたな、

と僕は胸を撫で下ろす。これで妙なバトル展開はなさそうである。
いやあ良かった。バトル展開とか心から御免被るからね。

と、そんな風に安心している僕のほうを見て、姉さんはクラスに
結論を通知した。

「では、試合の日程は来週の月曜日と火曜日だ。各自訓練をしてお
くように」

——ん？

ちよつと待った。何か聞き逃せないことが聞こえなかったかな。
…火曜日ってなに？え、二日…って、これはまさか！

「？織斑先生、何故二日に分ける必要がありますの？」

「…はあ。お前達、そこでコソコソしている奴の存在を本気で忘れ
ていたのか？」

「…あつ！」

「ブルータスお前もかあああ！！」

「誰がローマ人だ馬鹿者」

ねえさああああああんツ！！余計な事をおおおおおお！！
まさかの裏切りである。なんだよ別にいいじゃないか僕のこと
はスルーで！本人たちがヒートアップしているんだからそこに水を差
す必要は特に無いじゃないか！

バカな…どうしてこうなった！せつかくこの流れから逃げられる
と思ったのにツ！真の敵は身内にいたというのか…！オ・ノーレエ！

「やれやれ…言うておくが、別に嫌がらせで言ったわけではないぞ
？」

「いやあそれは明らかに嘘だよね姉さん！口元が微妙にニヤけてるのがなによりの証拠だよな！」

「……まあ、どうせお前は参加することになっていた。政府からお前のデータを取るように言われているからな」

「黙殺された！っていうか何でデータがいるのさ！僕入学試験のとき教師と戦ったでしょ！？」

「馬鹿者。あんな戦い方でデータが取れるか…そうだな、月曜日に零夏と一夏、火曜日にオルコットと男子2人が戦え。オルコット、できるな？」

「ふんっ、問題ありませんわ！」

「どんな戦い方したんだよ零夏…」

「って、最初から僕が戦うの決まってたの！？それならもっと早く言つてよ！今の僕のニヤケ面とか完全に姉さんの掌の上だったじゃないか恥ずかしい！！」

「というか、やっぱりあの戦い方じゃダメだったのか…でも、ああするのが一番勝率が高かったからやらざるを得なかったんだよなあ。僕飛べないし、相手が油断してたしね…」

「見ていなさい織斑兄弟！このわたくし、セシリア・オルコットが実力の違いというものを見せ付けてやりますわ！」

「ハッ、言ってる！俺たちは負けねえからな！」

「はあ…」

後悔先に立たず。

2人の宣言を横目にしながら、やっぱりこうなるのかと、僕はがつくりと机に突っ伏した。

ちくせう。命がヤバい勝負なら何があっても逃げるのに…この場合、『安全な戦い』だからなおさら否定しづらい。どうも最近本気

を出したのが原因かなあ…戦うなんて危ないこと、心の底から嫌いなはずなんだけど。

「——やれやれ。結局お前は戦いたいのかそうでないのか、どっちなんだ？」

「戦いたくないに決まってるじゃないですか…はあ…」

「そうは思えんがな。…まあ、別に死ぬわけでもない。お前も私の弟なら、ひとつの『試練』だとも思えばいいさ」

「——」

ぴくり、と身体が動いた。

——『試練』。

その言葉を聞いた途端。

僕は確かに、身体の奥底で、

魂ガ、震エルノヲ感ジタ。

(…まいったなあ)

わずかな期待を含ませた、姉さんの言葉を聞いて——僕は思う。

(…その言葉には弱いんだよね、本当に)

机に突っ伏したままでよかったなあ、とぼんやりと思う。

多分——今の僕の顔は、獣のように笑っていたと思うから。

——放課後になった。

「あ、2人ともちょっと待ってくださいーい！寮の部屋割についてお話があるんです！」

「…え？俺たちは自宅通学じゃなかったんですか？」

これからの予定に憂鬱になりつつも授業を終え、さあ帰るか…と

一夏と席を立つた丁度その時、山田先生がこちらに駆け寄ってきてそんなことを言った。

…ああ、忘れてたよ。そういえばこれがあったねえ…

「いえ、貴方達は色々危ないことが起こりそうなので急いで部屋を用意して、今はその説明をしに来たんです」

「ああ、そうでしたか。お疲れさまです先生」

「い、いえっ！れ、零夏くんも朝はありがとうございましたっ」

「いえそんな」

ああ…この先生いい子だなあ…精神的には年下なのも手伝って、つい頭を撫でてあげたくなるよ。さっきのやりとりで消耗してた僕の心がすごい勢いで癒されていきますよ！

しかし、癒されるのはいいんだけど…ひよつとしてこの流れだと、一夏は箒ちゃんと同室になって、僕もどこかの女子と同室になっちゃったりするんじゃないか？

やばい、多分これ当たりの気がする。…なんてこった…僕は疲れた心を家に帰って休ませることもできないのか。知っているか？女の園からは逃げられない。

い、いや、まだだッ！まだ可能性は残っている…一人部屋が、栄光の一人部屋が僕にはあるはずなんだッ！！悪足掻きでもいい、せめて可能性だけはつなげなきゃいけないんだ！

「先生っ！部屋を用意したという話ですけれどもっ！」

「ひゃあ！？あ、ははははいそうですか何か！！」

いきなりの大声、おまけに急に呼びかけられたことでテンパリ気味の山田先生だが、申し訳ないけど今の僕にそれを気にしている余裕は残念ながらない！一気に質問させてもらいますッ！！

W W
』

ふ…ふふ、燃え尽きたよ…真っ白にね。そんな僕に束さんの爆笑がどこからか聞こえてきた。どうして音のはずなのに草を生やしていることがハッキリ伝わってくるのだろうか。非常にウザい。

「し、しっかりしてください零夏くん!!」

「いや先生…なんでそんなに反応がマジなんですか…?」

呆れた一夏にまでツッコミを入れられつつ、それでも僕を駆け寄って抱き起こす山田先生。

その目にはなぜか大粒の涙が溜まっている始末である。…ああ、この子本当にいい子だなあ、こんなバカコントに付き合ってくれるなんて。ちょっと本気で感動してしまった。うん、ヘコんだ時はこの先生に癒してもらうのが一番だな。

「ああ、すいませんね先生…ちょっと、バカやりすぎたみたいですよ…」

「ご、ごめんなさい私の力不足で…というか今どこから爆発音が聞こえてきましたよ!? 大丈夫だったんですか!?!」

「——大丈夫だよ先生。僕もこれから、頑張っていくから」

「それは去るときの台詞ですよ零夏くん!? 明らかな消滅フラグです!!」

「ああ——安心した。…がくっ」

「それも死亡時の台詞ですってばあ! ね、零夏くうううううううんっ!!」

「…教師に何をやらせているんだお前は…」

正直このネタやりただけだった。反省はしている。

結局、この悪ふざけは、日誌を書き終わった姉さんのツッコミが

入るまで続いたのであった。

…ちなみに、何時の間にか一夏はどこかへ去っていた。まあ、たぶんトイレを探しに行ったんじゃないかな。六時間目の授業の終わりにくらしいに気付いたみたいだし。

こうして時間を潰して、部活後の篝ちゃんのシャワー時間と鉢合わせることになるんだろうね。さすが一夏である、最早感動的な手際の良さだ。もう色々どうしようもない男だと思う。

「…はあ。んで結局、これからは逃げられないんだよなあ」

——全力でフザケまくることによって、なんとか心の余裕は回復したものの…『女の子と同室』であるという事実は当然ながら消え去ったりはしなかったようだ。

はあ…。気が重い。

一応、姉さん達は一週間くらいで個室を用意してくれる、とは言ったものの、女子と同室で一週間心が休まらないってことなんじゃないかな、それ？年頃の男には厳しいものがあるよ…

…仕方がない、ここまできたら相手がいい子であることを祈ろう。

『1037』と書かれた扉を前にして、まずは当然、ノックを試みる。さて、一体誰が同室なんだろうね？

コンコン

……。

…ありや、無反応？

チートの身体能力を活かし、物音や気配を探ってみると——ん？中に一人いるみたいだなあ。なんで反応がないんだろうか。もう一回ノックを試みたがやはり返事がない。寝てるんだろうか？だとしたらえらく早い就寝になるけれども。

…僕は万が一にも一夏のようなヘンなフラグは起こしたくない。中に入る時は十分用心しないとね。

というか、あんなラッキースケベを散々やってたら普通理性のほうもたないと思うんだけど。姉さんの下着やらなんやらで慣れすぎてる、なんて言っても普通、慣れたりしないと思うんだけど。僕は全然下着には慣れないしね。

とにかく、貰った鍵を挿し、ゆっくりと用心しながら僕はドアを開けて——

「…は？」

目の前の光景に、硬直した。

…いや、えーと…なんだこれ？

冷静に部屋を見渡してみよう。IS学園の寮のデザインは玄関から入って、左手にシャワールームがある。どうやら洗面所も兼ねて
るみたいだね。まあそこは別にいい。

で、ちよつと進むと各々の勉強机が置いてある。ここも問題ない。
そして実はこれが一番最初に目に入ってたんだけど、特徴的な
が大きなベッド二つ…ふんわりとした、一目で上等なヤツだとわか
るものである。

で、そのうちの 하나가、ぬいぐるみで完全に埋もれている。

うんおかしいね。

詳しく状況を説明すると、ベッドの枕から足の部分まで全てがぬ
いぐるみで埋め尽くされており、もはや布団が判別不能な状態だ。
というか積み上げすぎてベッドからこぼれ落ちてしまっている。そ
れらも結構な数が僕の足元まで転がってきてるね。

え、なにこれ。

僕、ドン引きである。こんな膨大な量のぬいぐるみ、専門店でし
かお目にかかれないんじゃないのかな…ひよつとして、この部屋の
主は店ひとつを全て買い占めたんじゃないだろうか。とはいえこん
な数の量だとそもそも部屋に入りきらな――

『…きゅー…』

「って埋まってんのかよルームメイトさーんっ！！」

まさかの崩落事故だった！。何があつたのさ一体！？

ええい、とりあえずぬいぐるみを退かすぞ！後片付けの手間は今は考えずに、ぽいぽい人形を退かして…ってめちゃくちや多いな！あーもう鬱陶しい！

「おりゃあああつー！」

「わっひゃああああー！」

どばー！と怪力を利用してぬいぐるみを纏めて吹き飛ばす。勢いでその下にあつた誰かもゴロゴロとベッドから転がり落ちた。

…おいおい、ここまでぬいぐるみに囲まれていながら本人は着ぐるみまで着ているぞ…どこまで徹底しているんだか。最早呆れを通りこして尊敬まで覚えるレベルである。

「ふはー…あ、ありがとー助かったよー…あれ、おにーさま？」

「——え？」

「あー、ひどいよーおにーさま同じクラスなのに忘れちゃったのー？」

——この声を。

僕の思考が、その声を聞いた瞬間に硬直する。

その姿が、朝見かけたクラスメイトだからではない。もっと別のところで、心が…あるいは魂が、起き上がったきた少女の声に、既視感を訴える。

——僕は、この声を知っている。

それに戸惑う僕には気づかずに——少女は、のほほんとした挨拶を交わした。

「^{のほとけほんね}布仏本音だよ？？よろしくね、おにーさま」

——バーサーカーは、強いね——

その声は、どこか。

——『白い少女』の声に似ていた。

L i f e 4 凡人の心、英雄の魂（後書き）

英雄の力は果たして人間の器に収まるものなのだろうか。
彼は本当に『彼』なのか。

そんな疑問が、ひとつの少女の『声』から生まれた。

というわけで声優ネタを織り交ぜながらのほほんさん登場です。
一応ヒロイン候補の一人ですね。ルームメイトという強力な補正を
引っさげてます。しかし、僕はいいい加減ヒロインを決めるべきかも
しれない…

あと、勝手にのほほんさんがぬいぐるみ大好き少女だという捏造設
定をねじ込みました。

本当はそんなつもりじゃなかったんですけど、モフモフに埋まって
顔だけ出してるのほほんさんを想像したら自然と手が動いていまし
た。仕方ないね。

まさかのタイトルミス。修正しました

幕間 壱（前書き）

ISのカケラもないお話です。
幕間なのでスルーしても問題はありません。
ちなみにこの後もう一話投稿します。

アンケートのお知らせ

今作のヒロインがまったく決まらないので皆さんの意見を募集いたします。

- ・一夏のハーレムメンバーでない
- ・名前のついているキャラ
- ・亡国の人達は無理

以上の条件で皆さんの希望するヒロインをお聞かせください。
一応選択肢も書いておきます。

- 1 束さん
- 2 のほほんさん
- 3 山田先生
- 4 千冬さん
- 5 楯無さん（たぶんまだ一夏ハーレムじゃないですよね？）
- 6 それ以外
- 7 そんなことよりハーレムだ！

それでは、よろしくお願いします。

幕間 壱

——夢を見る。

白い。

最初に浮かんできたのは、そんな言葉だった。

空を見上げてみれば雪が降っている。…ああ、だから白いのか、と今更ながら僕は得心した。

一体いつから降っていたのだろうか、などと考えようとして、そんなことはどうでもいいことだと気付く。

ぼんやりと、辺りの輪郭を曖昧にしながら降る氷の粒は——考えるのが馬鹿らしくなるくらいに、綺麗だったから。

辺り一面は白く白く染まっていて、他の色はわずかに見え隠れする樹木の色くらいしかない。

今の季節は春だというのに、こんなにも雪が降り積もっているから…ああ、これは夢なんだな、と場違いなことを心の片隅で思った。

——深い深い、森の中。

——地面も、木々も、一つ残らず白に染まる。

その景色があまりにも美しくて。あまりにも神秘的で。

時間が経つのも忘れ、僕はこの白い世界に見入っていた。

肩に積もる雪も、吐く息が白くなるのも気にせず、ただぼんやりとそれを見続ける。

…どのくらい、そうしていただろう。

ふと、誰かに呼ばれた気がして——僕は後ろを振り向く。

『…え？』

不可解な事象に、思わず疑問の声が出た。

いつの間にか、僕の後ろに道ができている。

いや、道かどうかはわからないけれど——その場所だけ木が無い。まるで森そのものが、その場所に育つのを拒んだかのように、僕の背後にだけ不自然な空白が生まれていた。

どうして、と思ったけれど、そもそもこれは夢だったと思い出すなら、きっとこの先に何かがあるのだろう。ぼんやりと…まさしく夢心地で、僕はただ足を動かした。

踏み出した足跡は、すぐさま降り積もる雪に覆われて消えていく。何故だかわからないけど——それを、とても悲しいと僕は思った。

——そして、その場所に辿り着く。

この白い世界で——そこだけが違う色だった。

よく知っている少女の眠っている姿。

その身体に、無遠慮に絵の具を上から塗りつけたように——その部分だけが違和感を撒き散らしていた。

あまりにも鮮やかな、真紅が。

『——』

鼓動が、呼吸が、早くなる。目の前の光景を、脳が否定する。平衡感覚がおかしくなるのを感じた。歪んでいるのは僕なのか、

それとも世界なのか。それすらも判断がつかない。

ただ食い入るように少女を見つめて、僕は彼女の姿を見続ける。

——凍えた風が吹きつけ、木々を揺らした。

けれど、彼女は目覚めない。まるで寒さに気付かぬように。

——降り散る雪が、頬に触れた。

けれど、彼女は目覚めない。まるで寒さに呑みこまれたように。

氷の粒が『融けない』という事実が、突きつけているようだった。
彼女はもう、人形にホームンクルス戻ってしまったのだと。

もう二度と、彼女が目覚めることは無いのだと。

これが、死だ。

『——守れなかったのか』

逃げろ、と心が叫ぶ。

自分に降りかかる死も、他人に降りかかる死も。何もかもが恐ろしい。

これは僕のトラウマだ。生きている限り、この感触を忘れることはないだろう。まるで刻まれた烙印まじゅつのように、どうしようもなく僕を締めつける。

アレは在ってはならないモノだ。誰もが恐れ、否定し、遠ざけようとする、生きている全てと相容れないモノだ。

だから逃げる。今すぐ逃ゲロ。振り返ラズ二走リダセ——！

叫びに押されるように、よろよると心が揺れる。

意識がはつきりしない。呼吸も覚束ない。手足の感覚なんてとつくに無くなっていて、それでも立っていられたのはたぶん奇跡みたいなものだろう。

目の前には死。後ろには生。——なら、どっちを取るかなんて決まっているはずだ。そもそも僕にとって、これは選択肢ですらなかった。

ああ、なんて弱い——自分なんだろう。

その事実には、反吐が出そうな不快感を抱きながら。それでも僕は、

前へ進んだ。

『…白い少女よ』

勝手に動く身体に呆然としながら、僕は今更なことに気付いた。これは確かに夢だ。

だけど、ここに立っているのは——僕じゃない。

『私は、貴方を護れなかった。それでも』

吐き出す言葉には、確かに少女への深い感情が感じられた。ただ、死そのものが恐ろしくて逃げようとした僕とは違う。『彼』にとつて、これは譲れないことなのだろう。立ち向かって、勝ち取らなければならぬ何かがあるのだろう——

『貴方に渡された言葉、この誇りがある限り——』

少女を抱え上げ、『彼』は痛みをこらえるように、拳を握り締めながら——それでもなお、足を止めずに森から去っていく。

…夢だということに気付いたからだろうか、僕の意識は急速に薄れていく。恐らくはもうすぐ、この夢から覚めるのだろう。

遠のいていく白い世界にはただ、『彼』の独白が響いていた。

それを聞いて、思う。

…ここが僕の夢の中なら、どうしてこんなものを見たのだろう？ 逃げ出そうとする僕、挑もうとする彼。夢の中では僕たちは別人で、はつきりと分かれている。けれど、現実の…本当の僕は一人だけだ。なら、この夢は僕の『中』から出てきたのだろう。

ひょっとして、僕は——

『貴方のために、闘い続けます——』

——『英雄』のようになりたいと、望んでいるのだろうか？

幕間 壱（後書き）

とある平行世界。

アインツベルンはセイバーとしてヘラクレスを召喚し、その無双の技術で次々と勝ち進んでいく。

しかし、そこに巨大な壁が立ちふさがった。バビロニアの最古の英雄王、ギルガメッシュである。

彼の持つ『神を縛る鎖』の前には令呪すら効かず、彼は捕縛され、今回の『聖杯』でもあるイリヤを奪われてしまった。

鎖が解けて、急いでマスターの元へ向かうも…既に少女は、心臓である聖杯を抜き取られて息絶えていたのであった。

しかし、彼は止まらない。戦いをやめることはなかった。

少女の言葉に、望まれた誇りに応える為、魔力が切れ、いずれ消え行く体でも——それでも、ヘラクレスは少女を抱え、進んでいく。彼はまた、いつかの日々のように、途方もない試練へと向かっていったのだった。

彼の剣は果たして、太陽のごとき王に届くのだろうか——

という夢を見た、というお話でした。

前半はただの夢、後半からがヘラクレス視点ですね。

ちなみにこの世界線の基本はUBWルートなのでこの後小聖杯はシンジに突っ込まれています。ワカメエ…

今回はバサカ粹は無しで、セイバーオルタちゃんがアヴェンジャー名義で呼ばれて士郎に救われる話、という脳内設定。

ぶっちゃけオチは特に考えていませんが多分ギルが慢心して負けます。相変わらずいつも通りな慢心である。

さて、ある程度次の話でも説明していますが、今回の話は零夏の見

た『夢』です。色々な意味でヘラクレス強いよ生きるの辛いよというテーマでした。

裏話をしますと、零夏 능력は『ヘラクレス』の力を直接そのままコピーしたのではなく、冬木の聖杯により『サーヴァント』というカタチの概念に変換されたものをコピーしています。

神代の時代と現代とは『常識』などの尺度が違うので、このように濾過、あるいは翻訳しないと零夏には理解ができないわけですね。『現代に即した英霊化』というヤツです。

…まあ、『イリヤのことを覚えているヘラクレス』を出すための設定なんですからね。

要はバサカをクラスカードにしてから身体に突っ込んだようなものですな。狂わないけどね！

しかしバサカを喋らせると違和感が凄いですね。

一応きのこシナリオの某ゲームでは正気に戻ったバサカが書かれますけど、口調が執事のくせしてぱんつはいてない、更に虎聖杯には特注サイズの衣装を頼むっていうフリーダムっぷりでした。

こんなん資料になるわけねーだろ菌糸類イイ！！

L i f e 5 嵐の前に、朝食を（前書き）

やっとメインヒロインさん出せた！やったー！ポテチヨサトシクーン！

次回、ようやく戦闘です。VS一夏をお楽しみに。

アンケートのお知らせ

今作のヒロインがまったく決まらないので皆さんの意見を募集いたします。

- ・一夏のハーレムメンバーでない
- ・名前のついているキャラ
- ・亡国の人達は無理

以上の条件で皆さんの希望するヒロインをお聞かせください。
一応選択肢も書いておきます。

- 1 束さん
- 2 のほほんさん
- 3 山田先生
- 4 千冬さん
- 5 楯無さん（たぶんまだ一夏ハーレムじゃないですよね？）
- 6 それ以外
- 7 そんなことよりハーレムだ！

それでは、よろしくお願いします。

Life 5 嵐の前に、朝食を

——目が覚めた。

「…ああ、朝か」

一言呟き、僕は起き上がってカーテンを開ける。

シャアア、という音を立てながら日光が部屋に入ってきて、眩しさで少し目を細めた。

昨日に続き今日も晴れである。うーん、今日もいい天気

とりあえず、何の気はなしにパシパシと顔を叩く。痛みはないけど、衝撃があるのでここは現実のようだ。…うん、夢との区切りはしっかりつけないと、ね。

時計を見ると、時刻は六時半。いつもよりちょっと早起きというくらいだろうか。

寝起きはいい方なので特に眠気などは残っていないが、今見た夢のせいか微妙な気分である。

「『誰』の夢なんだか、まったく…」

ついつい、溜息が漏れてしまった。

先程見たことを思い出す。

白い世界、血まみれの少女、とあるサーヴァントの誓い——

誰かに話したら『漫画の読みすぎだろう』と言われることは間違いない。そんな内容の夢だった。

…僕の知っている聖杯戦争にあんなシーンは無かったから、やっぱりアレはただの夢でしかなかったのだろうか？バーサーカーのはずなのに喋ってたし。

あるいは、幾多の平行世界から『英霊の座』に集められたひとつの戦いの歴史なのかもしれないが…まあ、そんな考察はやめておこう。

キリがないし何より、違うとわかっていても、自分の中に他の誰かが居るなんて仮定は気持ちのいいものじゃないしね。

…それに、『平行世界』という単語を出すと、とある魔法使い宝石翁のことが——正確には彼が作った危ない危ないステッキのことが連想されそうだから危険だ。アレは色々まずい。

嬉々として混沌を振りまく東さんと、洗脳されて大変なことになっている姉さんの絵面があまりにも鮮明に浮き上がってくるし、一夏の周りの女子がそれに加えて更なる騒動を——マジでこのへんにしておこう。本当に実現しそうで怖いから。というかこのネタたぶん既出だ。

…うん、馬鹿なことを考えてたらいい感じに落ち着いてきたよ。

「相変わらず、僕は僕だ。呑まれないようにしないとね」

敢えて言葉に出して、自分自身の確認を試みた。

僕は『織斑零夏』だ——他の誰でもない。

人生を長く太く、幸福に生きて、死ぬのからひたすら逃げ続ける。それが僕だ。たとえ仕方なく戦うことがあつたとしても、『ヘラクレス』に変化するわけじゃないんだ。

そう自分に言い聞かせる。僕の心に鎧は無いから、こつこつケア

はきつちりとしておかないと。見た夢のことはとりあえず忘れて、今日もいつも通りの僕でいなきゃ、ね。

——なんてことを心に決めていたら、

「…んにゅむにゅむにゃ…」

「ん？」

もぞもぞと隣のベッドで音がした。

…ああ、そういえば昨日はルームメイトと顔合わせしたんだった。あれだけ意識していたのに今まですっかり忘れて、気配も探っていなかったあたり、今の夢で僕はけっこう動揺していたらしい。まずったな、独り言とか聞かれてないよね？というかカーテンを開けたりするんじゃないかったよ。迷惑だった。

「…うーん、朝あゝ？ぐつどもーにんぐ…？」

「ありゃ、これは申し訳ないなあ」

起き上がる声がしたので、結局彼女も起こしてしまったようだ。大失敗である。

とりあえずは謝罪をして、朝ごはんを奢るあたりで許してもらうことにしよう。そう考えながら、僕はとりあえず飲み物でも用意することにした。

「——ごめんね本音ちゃん。起こしちゃった？」

僕の『能力』は、第五次聖杯戦争の『バーサーカー』の…つまり、大英雄ヘラクレスの力を得る、というものだ。

それは、ただ単に宝具や身体能力を手に入れる、ということではない。

そもそも普通に暮らしていた僕が唐突なバトル展開とかができるわけがないのは明らかだ。力というものは道具だけでは決まらない。拳銃ひとつだって素人はそう当てられるものじゃないんだ。

だから僕は、ヘラクレスが持っていた『経験』、『判断力』、『技術』など——数多くの彼を構成するパーツすべてをそのまま貰い、身体の内にも保持している。

「くう…すぴー」

「こらこら本音ちゃん起きてー。年頃の男に簡単に寄りかかっちゃダメだよ？」

「…んー…ねむいのはおにーさまが起こしたせいだよ…」

「それを言われると申し訳ないけどさ…というか、『おにーさま』ってやめない？そもそも同い年だし」

「はあ…い…じゃあ、他の名前考え…すやすや」

「ああ、寝ちゃった。…というか、さっきから思ってたけど…なんだこのかわいい生き物」

これにより、僕は（体格などの一部を除いて）英雄の戦闘力をそのまま手に入れることができている。はっきり言って、今の僕を倒せる存在なんてISを含めても殆どゼロだろう。それほどヘラクレスという存在は強力なのである。

だが——『経験』があるということはつまり、様々な『記憶』もあるということだ。

英雄本人の『人格』は無いにしろ（あつたら僕なんて押しつぶされてるかも）、『記憶』というものは人格形成に大きな影響を与える。その上ヘラクレスは勇猛さでその名を轟かしている英雄でもあるから尚更だ。

だから、教室でそうだったように、『ヘラクレスに関連したこと』を感知した場合、僕はやや性格がブレることがある。そういう意味でも、戦闘とかが好きじゃないんだよね。やってる最中はやけに好戦的になって、後になってものすごい後悔やら恐怖やらが押し寄せてくるから。

「ふー、朝練疲れたー飲み物飲み物…って、おおおお兄さまッ!？」
「そんな!？既に女の子と朝チュンを迎えてッ!？」

「僕は違います。…というか、まだ朝だから静かにね?」

「あ、御免なさい…」

「…すぴー」

「よしよし。で、この子は普通にルームメイトなだけで、抱きついてるのはむしろ小動物的なコミュニケーションの一端だと思うよ」

「ああ、なるほど…」

「そりゃー本音だもんね…」

「…なんか妙な信頼だねえ君たち…あ、本音ちゃん食堂着いたよー」

「はっ！デザートっ！！」
「『眠気より食い気！？』」

さて、そんな話はそろそろ切り上げるとして、現在の状況を説明しよう。

時刻は七時十五分。

僕はコーヒを一服してから身支度をして、本音ちゃんと食堂に来たところで……と、その前にルームメイトの説明がまだだったね。

僕の隣にいる眠たげ少女。彼女の名前は、布仏本音という。

一夏は原作で『のほほんさん』と呼んでいる少女だ。いつも袖が余っている服を着ていたり（というか今の彼女の格好は完全に着ぐるみだ）、間延びした口調、柔らかい笑顔、あと個人的には穏やかな声などが印象的で、周囲に独特のほんわかとした空気を振りまいてくれる子である。

故にあだ名が『のほほんさん』。実は一夏は途中まで本名を知らずあだ名で誤魔化していたという経緯がある。なんて奴だよまったく。

で、どうして僕がそんな彼女を名前呼びしているかと言うと、特に好意やらの意味があるわけではなく、むしろ自分へのケジメのよきなものである。

時は遡り、昨晚。ついつい『白い少女』と目の前の彼女をどうしても比べてしまい表情が硬かった僕に、『ルームメイトなんだから名前呼びでいいよ』と本音ちゃんが親切心から言ってくれたのが切っ掛けだ。

なんというか、それを聞いた時にようやく僕は自分の無礼に気付

き、心底恥ずかしく、また彼女に非常に申し訳ない気持ちになった。人はそれぞれ明確に違うというのに、声が似てる程度で何をやってるんだ僕は。数分前の自分をブン殴りたい気分である。

そんなわけで、今後は絶対に声なんぞに惑わされずに接するぞ、という決意も込めて彼女のことは名前で呼ぶことにしたわけなのだ。

…ただのんびりとしているわけじゃなくて、こういう気を配れるところが本当にいい子だなあ。山田先生と並んでの癒し系筆頭少女、それが本音ちゃんだ。非常にありがたい話である。

そして状況説明に戻ると、そんな彼女を連れて現在食堂に来て、朝練帰りであろうクラスメイトの女の子2人に出会ったというところである。

どうやら友達からも本音ちゃんは恋愛からはほど遠いと思われるようだ。…まあ、原作では一夏にもぺたぺたくつついてたみたいだしその通りなんだろう。たぶん。

「じゃ、ここで話してるのもなんだしとりあえず朝メシ食べちゃおうか。僕は案外大食いだから時間取るんだよね」

「え、意外ですねお兄さま、そんなに食べるんですか？」

「一夏の五人分とか余裕」

「「！？」」

「今日はいつもより豪華なデザートだ〜！」

そんな僕の話に反応することなく、本音ちゃんはこれからの食事に思いを馳せていた。その目はキラキラと光っていてどこことなく漫画のような瞳になっている。

…そんなに僕の『奢るから許してくれない？』という言葉が嬉しかったんだろうか？まあ、IS学園だから値段が高いものも揃って

るのかもしれないね。僕の財布は案外金入ってるから大丈夫だけど。
…女の子なのに朝から色々食べて大丈夫かな？とも思ったけど、
まあそこまで口を出すことでもないか。

さて…お待ちかねの食事タイムだ。

学園では他の生徒がいるからあんまし迷惑をかけないように注文
しなきゃいけないけど、この時間ならたっぷり量は摂れるはずだ。
焦る必要はどこにもない。

…さて、IS学園のメシはどんな味かな？美味いと評判だし、
今から色々と楽しみだな…！ククク…！！

「——行くぞおばちゃん。米の貯蔵は十分か…！！」
「フ、こちらら和洋中全て取り揃えてるよ——！！」
「え、なにこの展開っ！？」

ツッコミの声を敢えて無視し、僕は食券の自販機にコインを突っ
込む。

僕はこう見えてけっこうな量のメシ屋を泣かせてきた大喰らいだ
ッ！味にはけっこううるさいぞ！！（ウザい客である）
フードイーター

これからお世話になる身としては最初が肝心！料理を作ってくれ
たことに感謝しながら——おばちゃん！その能力、測らせて貰う
ぞッ！！

「――頂きますッ!」

ゴォッ!と、謎のオーラを出しながら、差し出されたA定食の箸を掴み取る。

こうして、後に『伝説の始まり』とも呼ばれる、僕たちの最初の闘いが――幕を開けたのだった。

「うーん、この鯖がいい感じの味出してるな!。箸、そう思うだろう?」

「あ、ああ。そうだな」

「いやー、後で味の出し方教えてもらえっかな?企業秘密とか言われるかも」

ぱくぱくと朝食を摂る一夏を横目で見ながら、こっそりと――誰にも気付かれないように、篠ノ之箒は溜息をついた。

自分は、織斑一夏のことが好きである。
それはどうしようもなく明らかなことだ。本人に言えるかは別問

題として、箒はその気持ちを認めていた。ずっと、健気に、箒は一夏のことが好きなのである。

では、織斑零夏のことをどう思っているか？と聞かれると、彼女は非常に返答に困るだろう。

そんな、一言では言い表せない複雑な感情を、彼女は零夏に抱いていた。それは、彼女が姉に持つ感情に似ているかもしれない。

さて、ここでひとつの疑問が生まれる。

一体なぜ、一夏が隣にいるのにわざわざ別の男のことを彼女が考えているのか？

…その答えは簡単だ。

「いやー、美味かった。これが毎日食えるとか幸せすぎるよ」

「またお前はそういう荒らし行為を…昔賞金を荒稼ぎしてただろうに」

「国の税金でメシがうまい！」

「お前は一回怒られる！」

「正直すまんかった。…ああそうそう、一夏。結局、ルームメイトは誰だったんだい？箒ちゃんかな？」

「あ、よくわかったなあ。そうだぞ」

単純に、目の前に他の男——織斑零夏がいるからである。

ちなみに、彼は既に食事を終えており、隣ではそのルームメイトが幸せそうにパフェを食べているところだ。朝からそんなに力ロリを摂って大丈夫なのだろうか、などと箒は頭の隅で思った。

しかし、正直な話——そんなことを指摘する余裕は、彼女には

ない。

(…私に話題が及ぶ前に離れるべきだな)

一人そう思い、箒は静かに息を吐く。

食べるスピードを少し上げる。箸が止まっている一夏よりも早く食べ終わるように。なるべく『隙』を見せないように静かにしながら、箒は目の前の魚をつまもうとして――

「ふーん。じゃあもうとつくに箒ちゃんは、一夏にセクハラされたんだろうねー」

――バキィ!と、持っていた箸がヘシ折れた。

「な、何言つてんだよ零夏っ!? おい箒、大丈夫か? 怪我ないか?」

「あ、ああいや、だだ大丈夫だももも問題ない」

「全然大丈夫じゃなさそうだぞ!？」

箸を折ったこともさることながら、心配した一夏が顔を近くに寄せたことも大丈夫じゃない原因なのだが、当の本人はそんなことはまったく気付いていないようである。

昨晚、バスタオル一枚の姿をガン見したのを早くも忘れているのだろうか? この優しさもヘンな具合に問題になっているようである。そんな一夏の反応に嬉しいやら呆れるやらで顔を赤くしていた箒だったが、

(…!?!? し、しまッ)

今の行為は——致命的な『隙』だった、ということに今更ながら気付く。

ハッ！と気付いてそちらを向くと、零夏がその様子をニヤニヤしながら見ていた。あまつさえ、『よかったね』などと口パクで付け足してくる始末である。

怒りと羞恥で顔が赤くなるのを感じて、思わず拳の一発でも喰らわせようとした筈だったが、しかし一夏が近くにいるせいで大きなアクションを取れなかった。『これも計算通りなのか…ッ！』と、零夏の（無駄な）手際の良さに非常にイライラする筈。

そう、これが筈が零夏を好きになれない理由のひとつだった。

要するに、彼は筈で遊ぶのである。

昔からどういうわけか自分の恋愛感情を知っていて（バレバレでした）、筈が本気で怒らないくらいのレベルでからかってくる。たまに『アメ』のような一夏との接触をさせたりするから尚更、まるで動物扱いされているようで筈は彼のことを苦手としていた。

そう、恐らくは自分に意地悪な兄がいたらこんな感じだったろう、と筈は思う。同じ年のはずなのに、どういうわけか零夏は大人びていて、自分は無口だったこともあり絶対に口ゲンカでは敵わなかったのだ。

得意の剣道に持ち込もうにもものりくらりとかわされ、最終的には何故か一夏と練習をすることになり有耶無耶にされていた。そして筈も何時の間にかその状態に満足して誤魔化されていた。

（ぐッ…ッ、今度は忘れんぞ…ッ！）

しかし——もう箒も高校一年生である。さすがにあの時のようにはいかなかったろう、と彼女はタ力をくくっていた。

これからの学園生活ではキツチリ文句を言つて、誤魔化されないようにするのだ、と彼女は誓つたのだ。

大事なのは口車に乗せられず、『アメ』に引つかかったりしないことだ。故に、これからは零夏の行動に細心の注意を払っていれば問題ない。そう、細心の注意を——

「いや、ゴメンゴメン。まさか箸は折れるとは思わなかったよ」

「違つたろ！まずセクハラ云々のことを謝るべきだろうに！」

「え？してないの？」

「……………してない」

「…バレバレじゃん…まあ、正直それはどうでもいいや。ねえねえ箒ちゃん、箸が折れちゃったんならさ——」

——来たか！これを言わせるわけにはいかないッ！

これさえ止めれば大丈夫だ、たとえどんな『アメ』が来ても、心構えさえあれば問題はないのだ！

「ふんっ！おい零夏、悪いと思つているならお前はこれ以上喋るな。もう私はお前に騙されたりは——」

「一夏に『あーん』してもらつたら？」

「しないのだ——えっ」

思わず、箒の動きが止まった。

……。

……。

長い沈黙が過ぎ、そして――

その後、零夏と本音が去ったテーブルの後には、なんだか甘酸っぱい、周囲からガン見される妙な空気が漂うことになる。

結局――箒はまたもや、零夏に逃げられてしまったのであった。

L i f e 5 嵐の前に、朝食を（後書き）

また朝チュンだお…ねむいお…

今回は日常編。で、本編同様ISの修行なんて零夏にはないので一週間はキンクリさせて頂きます。ご了承ください。

それにしても、篤ちゃんが本当に動かしやすいです。感動です。

というかモツピーまでちよろいキャラになっちゃいましたけどこれ大丈夫なんですかね…？

でも、原作でもだいたいこんな感じなんですよね。将来大丈夫なんでしょうか。弄んでおいてなんですが心配です。

しかしここまで力入れてもシャルロットとラウラが来たら吹き飛ばされるのがモツピー。

すさまじいキャラパワーですよねえあの2人は。特にシャルが。がんばれモツピー！君の明日はどっちだ！

…え、その前に一人抜けてる？何の事やら…（すつとぼけ）

さて、ヒロインの方ですが、午前六時現在、こんな深夜〜早朝にもかかわらず結構な量のアンケートに関する感想が来ました。みなさんありがとうございます！

現在のはほんさんが優勢ですね。なんというか、優遇しすぎたかもしれない。次点は束かな？

しばらくアンケートは実施いたしますので、お暇な方は投票をどうぞ。

あと、僕今右手が腱鞘炎になりかけてるんで更新が遅れたら病院送りになっていると思うてください。

三日、四日に一回は更新していきたいと思いますので、申し訳ありませんがお待ちください。

L i f e 6 強さの在り処、強者の在り方（前書き）

アンケートが一気に40件以上来てびっくりでした。

感想の海に溺れる！溺れる！

これが嬉しい悲鳴というやつですね、ありがとうございます。

アンケートはもう少し募集させて頂きます。

で、思ったのですが、ハーレムという書き方ではなく『のほんさんと束さんがいいです』的な書き方もすごく多かつたんですけど、これは複数の女の子と三角関係的な流れを望んでいるってことではないんですかね？

女の子全員の幸せが望まれているのか、悲しい二択の末に選ぶのが美しいのか。うーん悩みどころですね。番外編という手もあるしなあ。

あと、今回の話は前編です。延々と書いてたらバトルに入ったところで途切れちゃったよ！これが予告詐欺か！申し訳ありませんでしたッ！！

アンケートのお知らせ

今作のヒロインがまったく決まらないので皆さんの意見を募集いたします。

- ・一夏のハーレムメンバーでない
- ・名前のついているキャラ
- ・亡国の人達は無理

以上の条件で皆さんの希望するヒロインをお聞かせください。
一応選択肢も書いておきます。

1 束さん

- 2 のほんさん
- 3 山田先生
- 4 千冬さん
- 5 楯無さん（たぶんまだ一夏ハーレムじゃないですよね？）
- 6 それ以外
- 7 そんなことよりハーレムだ！

L i f e 6 強さの在り処、強者の在り方

そんなこんなで、一週間が過ぎた。

今日は月曜日。

一組女子一同が待ちに待った、織斑兄弟の——つまりは、僕と一夏の対戦日である。

え？話が飛びすぎてる？いや、だって仕方ないじゃないか。一夏にはどうも色々なイベントがあったようけど…僕については、正直たいして何もなかったんだよねえ。

あの後僕がやったことと言えば、授業を受けて、また食堂でごはん食べて、たまに箒ちゃんをからかって、高笑いと共にやってきたオルコットさんの挑発をスルーして怒らせからかった程度だ。

…ああいや、そういえば一応今日に備えての行動もしたっけか。何もしないと姉さんに色々言われそうだったから。授業が終わった放課後はIS学園の資料室で様々な世界大会の対戦風景を映像で見たりした。

なぜか本音ちゃん他一部の女子もついてきて上映会みたいになっちゃってたけどね…本来止めるべきの山田先生もノリノリで解説役になってたのには笑った。

ちなみに、一夏と箒ちゃんの剣道には僕は呼ばれていない。理由？いろんな意味で箒ちゃんが嫌がったんじゃないかな。

まあ、一応僕と一夏は敵同士だし、あんまり一緒に特訓するべきじゃないだろう。そこまで厳密なライバル関係を結びたいわけでもないけど、まあ要は気分の問題だ。

…そういえば、そもそも箒ちゃんは僕の身体能力については知らないのかな？一夏は僕と姉さんが一度だけ戦ったのを見たことがあるけど、アレは箒ちゃんが転校した後だった気がするし。

なら、ひよっとすると今回のことが終わった後で箒ちゃんの対抗心に火をつけちゃって『零夏！私と剣道で勝負しろ！』とかいう展開になるかも…

…いや、多分ないな。あの子はそれよりも僕にからかわれることが嫌で近寄らないだろう。苦手に思われているのは知ってるけど、箒ちゃんって不器用だからつい遊んだり助けたりしたくなっちゃうんだよね！。

「…はあ」

それにしても、憂鬱である。

一夏と戦うことに関して…では、ない。まあ流石にここまで来たらある程度は覚悟を決めたさ。憂鬱の原因はそちらではなく、もっと別の問題である。

今、僕は既に決戦の舞台（というのは誇張表現だけど）である第三アリーナの選手待機室みたいところで闘いが始まるのを待っている状態だ。

そう、問題はこの『待っている』という状況だ。何故僕がここまで延々と脳内の思考を垂れ流していたか考えてほしい。物事には何事にも理由というものがあり、この回想もれっきとした意味がある

のだ…ってまあ、これは大げさすぎるか。
要するに、僕は暇なのである。

「まーだ『白式』は到着しないのかなあ…」

——僕がここに入ってから、既に四十分が経過していた。

いや、うん。原作で到着が遅れるのは知ってたけど、まさかここまで待たされるなんて誰が思うだろうか。

今にして思えば、姉さんが月曜日を僕と一夏の対戦日にしたのはこのための伏線だったのか…！『一夏が経験を集めるように』なんて身内囂屑をする人じゃないから不思議だったんだけど…赤の他人を待たせるよりは身内でいいか的思考だったんだね！僕の扱いが酷くて悲しい。

しかも、今の僕はピットに独り。一夏は篝ちゃんや姉さんと時間潰しができたかもしれないけど、僕にはそれすら無いよ！クラスの女子は本音ちゃんを含め観客席だし、山田先生は準備で大忙しだし！僕に味方はいないのか！

『呼んだ？』

「呼んでません」

貴方は味方かどうか怪しいじゃないですか。

「というかこの四十分ずっと僕のことを観察してたの！？暇だったんだからさっさと話しかけてよ！」

『お、期待通りのツツコミだあ！いや、そのリアクションが欲しい

がために待ってたんだよ！」

「やっぱりアンタは僕の敵か！！」

：しかし、前から思ってたけど…僕、明らかに監視されてるよね？
プライバシーはどこへいったのやら。

まあ、束さんはきちんと僕の精神に配慮して、極端な嫌がらせ行為は控えてくれていると信じてるよ。なにせやりすぎると姉さんの
O H A N A S H I
暴力が待っているからね。束さんもそこまで自由はできないだろう。

：ちなみに、場合によっては僕も参加します。あんまりにもアレな日常を見られていたら記憶喪失になるまであらゆる手段を強行せざるを得ない。そこらへん理解してますよね束さん？

『ただだ、大丈夫だよ！束さん特性センサーでそこらへんの節度はきつちり守ってるから！』

「いやいやいや。どんなセンサーならそんなことできるのさ」

『すっごいセンサー！』

——恐らくこれはツツコミを入れてはいけないところなのだろう。
うん、アレだ。篠ノ之博士は世界—イイイイ！—としか言いようが無い。

ああそうそう、暇つぶしも兼ねて、どうして束さんが僕のことを『監視』してられるかの解説をしておこうかな。これからの試合にも無関係じゃないし。

さて、今更説明することもないと思うけど、ISの対戦というものはそもそもお互いのシールドエネルギーを削りあい、先にそれを0にしたほうの勝ちとなる。

戦闘で多少装甲が吹き飛んだりして戦闘不能になることもあるが、基本的にはシールドエネルギーの有無で勝敗が決まる。当然ながらIS同士の戦いではこれが一番重要な要素なわけである。

どのように相手のエネルギーを削るか、自分のエネルギーを守るか…という戦術を各個人は組み立てて戦うわけだね。

しかし、ちよつと待ってほしい。この短い文章の中に、既に大きな落とし穴があるのに皆さんお気づきだろうか。普通の人なら何も問題はない…しかし、普通じゃない人にとっては明らかに致命的な問題がここには含まれているのだ。

「僕、そもそもISじゃないからシールドエネルギーが無いよ」
『仕方ないね!』

なんということでしょう、僕は世界初・ISと戦うことができないIS保有者なのである! いや、戦闘はできるけどやったら色々ばれてバケモノ扱いされること間違いなしだ!

…そりゃそうだよ、そもそもが本人に話を通さず、束さん一人で勝手に嘘をでっち上げてやってたことなんだから様々な問題が浮上するのは当たり前だ。

しかし、そこは天才・篠ノ之束クオリティ! なんと彼女はそんなまでをきつちり考えていたのである! なんとという(無駄な)手際の良さなのか! せつかくこれを理由に『勘違いです』って言うおうとしてたのにバカじゃないんだろうかあの人は! 畜生め!

エネルギー残量すら表示できない(というか無い)僕の『形のな

いIS』。そんな問題を解決するため、束さんが僕に用意したモノ——それが、『コレ』である。

『さあさあ、束さんの自信作をキリキリ取り出すんだよねーくん！』
「テンション高いなあ……えーと——『展開』」

キーワードを呟くと、ISが展開された時のような光が発生し——
数瞬後、僕の手の中には褐色のスーツが収まっていた。

その名も——特殊多機能対ISスーツ、『令装』。

束さんいわく、ISスーツのような外見をしたこのスーツを使えば、僕は本来持っていない『シールドエネルギー』の残量を存在するように『見せかける』ことができる……らしい。詳しいことはサツパリわからないが。

このスーツは普段はどこぞとも知れない空間に収納されていて、僕が脳内で念じれば自動的に出てくるようになっていた。専用機持ちはISスーツを格納して自動展開するシステムがあつて、僕のはその応用だそうだ。ちなみに今はスーツをそのまま手に取り出した状態だけど、自動で装着することも可能である。

……いやいや、応用で済むレベルなんだろうかこれ？色々な意味でツツコミどころが満載じゃないか。出したりしまったりするエネルギーとか一体どこから引つ張ってきているのだ。あと何故僕が念じただけで出現するんだ。僕の身体にこっさり何かしてないだろうね束さん……

まったくもって謎の技術である。……どうやったのか聞いてみたいけど、どうせロクなことにはならなそうなので話題を振るのが怖い。我慢しよう。

しかもこのスーツ、偽装だけでなく他にもオマケ機能が大量にく

つついている。IS間のコア・ネットワーク通信もできたり、位置情報のサーチとかも可能だ。そして更に、

「僕のことを盗撮・盗聴する機能がとりあえず確実にについているよね…」

「えっへん！どうだいれーくん！束さんを褒めてくれていいんだよ！！」

「うん、そうだね。次会った時にはアイアンクローをプレゼントするよ」

『えええ！？』

僕の怒りは、既に有頂天なのであった。僕パンチングマシンで計測不能とか普通に出すし。

こうして、束さんに誓いを立てたり、微妙に技術力に引いたりして更に二十分グダグダしていると——ようやく、ピットに備え付けられていた端末が、ピーピーと音を立て点滅を始めた。

それを見て、緩んでいた空気が引き締まる。…と同時に束さんの気配も消えた。恐らくは、これから僕たちの試合を解析することに集中するのだろう。

静かに目を閉じる。…自分の意志とは関係なく、肉体が瞬時に準備を完了させていたことを理解しながら、その違和感を拭い去るように、僕は『令装』の袖をギュツと握った。

今の自分は、どんな顔をしているのだろうか。

そんなことを思いながら、僕はぽつりと呟いた。

「——ああ、やっと始まるのか」

一方その頃、零夏がいるのとは反対側のピット。

「——ああ、やっと始まるのか」

様々な計測器を準備し終え、ようやく肩の荷が降りた織斑千冬は、ふとそんなことを呟いた。

かなり遅れて到着した『白式』は、既に一夏に装着され出撃している。なんの準備もできていない状態だが、そのあたりは零夏との戦闘でなんとかしてもらうしかないだろう。

『むしろ私の弟ならばその程度なんとかしろ』などと思っているあたり、彼女の厳しさや信頼が見て取れる。

「そうですね…結局、零夏くんは随分待たせてしまいましたよね？
後で謝っておきましょうか…」

「なに、気にするな。零夏だから問題ない」

「ええっ！？いくらなんでも扱いが酷すぎませんか！？」

「ち、千冬さん…厳しいですね…」

「アイツも一応『兄』だからな。というか篠ノ之、織斑先生と…いや、今は放課後だ。別にいいか」

…これも厳しさや信頼ゆえだろうか？

真耶が思わずツツコミを入れてしまうくらいに、零夏の扱いは残念であった。本人が聞いたなら『ひどいや姉さん！横暴だ！この休日下着女め！』などと叫んで千冬にブン殴られそうな台詞である。

さて、現在、この場にいるのは三人。織斑千冬、山田真耶、そして——篠ノ之箒だ。

一般生徒にすぎない箒が何故ここに居るかというと、ずっと一夏と『白式』を待っていたために観客席のほうは既に空席が無くなってしまっていたからだ。今回の試合にはクラスメイトだけでなく、一学年の生徒のほとんど…どころか、全校生徒が押し寄せている程である。

実は集団にいるのが苦手な箒だ。千冬のこの配慮には非常にありがたく、先程は深々と頭を下げていたりもした（故に、零夏の扱いの酷さには若干引いていたりもする）。

「あ、一夏くんが出てきましたね」

「！」

真耶の言葉に反応して、箒はISを纏った一夏のほうに目を向ける。

開いたゲートから飛び出した一夏は、アリーナの外周を飛んで時折調子を確かめるようにぐるりと宙返りしたりしていた。

時折見えるその顔立ちは凛々しく、箒は六年の歳月を経て成長したその顔立ちについて魅せられる。観客席からキャーキャーと歓声が飛ぶのに多少ムツとしながらも、箒は自分の鼓動が早まっているのを感じて、彼女は胸に手を当て、こっそりと呟いた。

「……一夏、頑張れ」

「やれやれ。アイツも大人気だな」

「っ!？」

「ふむ、零夏も出てきたか」

小さな呟きにさらっと返答されびっくう!と身体を震わせる箒。

しかし言った本人はそちらのほうを向かずに、ただもう片方の弟に関心を寄せていた。

聞かれた恥ずかしさに顔の紅みを深めながら、箒はバツが悪そうに画面に目を戻し、

「——え？」

身体を硬直させた。

目の前のスクリーンには、解放されたゲートの淵に佇む零夏が映っている。

流石に人間のサイズにカタパルトは使えなかったのだろうか、零夏は金属の床の上を歩いて移動していた。その身体は褐色のスーツで覆われており、見た目だけなら先程のISスーツを着た一夏の格

好と似たものだ。違うところは、彼のスーツには腰に布のようなものがアクセントとして巻きつけられている程度だろうか。

そう、ただ彼は歩いているだけだ。こちらの方を向いてすらいない。

それだけなのに——簞はなぜか、鳥肌が立った。

「……なんだ、アレは」

先程とは違う意味で、どくんどくと鼓動が早くなるのを感じる。それに気付けたのは、がむしゃらながらも簞が剣道に打ち込んでいたからだろうか。

剣道など、武術を学ぶ者なら誰もが習得する『眼』。観察眼と言いつてもできるだろう。そして、常人よりも優れた簞の眼は、今の零夏を見てある一つのことを語っていた。

——アレは、ニンゲンを超えている。

気を抜いているだけで彼の『気』に吞まれるような錯覚を覚える簞を横目に、モニターの中の時間は止まらずに進んでいた。

『来たのか、零夏。…本当に『カタチがないIS』なんだな。そうしてるとただのコスプレにしか見えねえや』

『遅れたのはそっちの方だよ？しかし、一時間以上待たせたくせにまだ一次移行も終わってないとは。姉さんは何か言ってた？』

『…千冬姉には「ぶつつけ本番でなんとかしろ」ってありがたいお言葉を貰ったよ』

『ふむ。ひよつとして僕は姉さんに面倒ごとを押し付けられたのかな？』

話しかける一夏に、零夏は文句も混ぜつつ言葉を返していた。大勢の観客が2人に注目するが、流石に彼らも視線にはもう慣れている。

——静かに笑う零夏に、いつものような緩みは見当たらない。むしろ言葉の端に喜悦を滲ませ、零夏は一夏と向かい合っていた。その目に見えない圧迫感に、少しづつ観客席のざわめきが消えていく。『白式』のハイパーセンサーを通すまでもなく、一夏も理解していた。

（零夏は…本気だ）

彼は既に戦闘態勢を終えている。…攻撃してこないのはあくまで、自分の『準備』が終わっていないからに過ぎない。それはまさに、相手が剣を抜くまで自分は切りかからない、という一種の『余裕』だった。

嘗められている、と一夏は思わない。

むしろ当然だと思った。

（——零夏は、千冬姉よりも強いんだ）

取り出したブレードを知らず知らずのうちに強く握って、一夏は目の前の『兄』を見据える。

そうだ、決まっているじゃねえか、と一夏は思った。奇しくも、零夏の持つ『原作』と同じ思いを、彼は心の中で宣言する。

（——他のあらゆる面で負けているなら、せめて心だけは負けなようにするんだ…!!）

それを見て、零夏は果たして何を思ったのか。

『——いい表情だ^{かお}』

『弟』の顔を見ながら、『兄』は薄く笑ってそんなことを呟いた。

不意に——トン、と零夏が跳躍する。

「っ!?!? 零夏くんっ!?!」

「落ち着け、大丈夫だ」

思わず真耶が叫んだのを、千冬が制する。

彼女の言ったとおりに、5メートル以上はあるゲートの淵から跳んだ零夏はそのままアリーナの土に音を立てて着地するも、平然と立ち上がって一夏を見上げた。

負けじと一夏もそれを睨み返す。不敵に笑う兄の姿に、自分の口の端も釣り上がるのを一夏は自覚した。

『ビルからいつ飛び降りても大丈夫そんな強度だな、零夏』

『むしろ飛び移るくらいはできそうだけどね。…さて、一夏』

軽口を言い合いながらも、それでも2人の間の空気は張り詰めている。その空気が限界に達し、双方が激突するのはもうすぐなのだと、この場の全員が理解していた。

『今から始まるのはあくまで前座だ。戦闘とは呼べない、むしろ訓練というべきモノだね』

『…今の俺は、闘う相手として不足だってことか？』

『その通り。一夏はまだ不完全だからね。自分が一番わかってるだろうっ？』

『…そうだな』

思うところがあるのか、苦々しく返答する一夏。

それを見て、真耶は眼鏡の位置を直しながら、千冬に自らの疑問をぶつけた。

「織斑先生、これはつまり…」

ファースト・シフト

「一次移行を終えていないことを言っているのだろうな」

「…『専用機』として成立していない状態では、零夏にとって一夏は『敵』ではないと？」

不思議そうに、というよりは不可解な表情を浮かべた筈も、それに口を挟む。

彼女にとつてISはあくまで『道具』であり、セシリアのような専用機を持つことに対しての誇りは無い。故に、自分と同じようにそんなことには執着しないであろう零夏が、どうしてあのようなことを言い出したのが気になったのだ。

「ここで問題になるのは『専用機』ではないな。言ってしまうば、今の一夏は刀を鞘から抜く方法すらも知らずに戦場に立っている状態だ」

「…あるいは、銃に弾を込めるやり方を知らない、ですか？」

「そうだ。だから、零夏は『これは実戦ではない』と言っているのだろう」

——戦場に立つならば、武器を持つ者はその務めを果たさなければならぬ。

それは、千冬が一夏に学ばせたかったことでもある。『あらゆることには責任が伴い、人は何かをしたならばその対価を背負わなければならない』。かつて、千冬が一夏に言った台詞だ。

この言葉は、今すぐにやれ、出来ないならば止める——という意味ではない。

出来ないならば、出来るように努力する。途中で投げ出さず、最後まで真摯に自分が行ったことと向き合い続ける。それが、生きていくために一番大事なことなのである。

「要するに、零夏は『今から刀の抜き方を教えてやる、これが実戦

なんて思っな』と言いたいんだろっさ」

「…つまり、零夏くんは『実戦』をしたことがあるんですか、織斑先生？」

「その辺りの話はまあ、そのうちな。とはいえ今回のことは丁度良かった。ISというものは持ち主に適応するように出来ている。あいつの場合、^{一夏}実際に戦うのが一番いい方法だろう」

「千冬さんはそこまで考えて、オルコットの前にあの2人を戦わせたのですか…？」

「…いいや、そんなことは考えていなかったさ。なにせ私は――」

――あいつらの姉だからな、どちらかを鼻屑するわけにはいかな
いんだ。

最後の言葉は口に出さず、千冬は『弟達』を見続ける。

こうして話をしている間にも、一夏と零夏は言葉を交わし続けていた。

『まあ、一夏ならすぐ闘えるレベルにはなるだろうさ。一夏の『準備』が終わるまでは武器を使わないであげるから、さっさと調整を終わらせてるようにしてよ？』

『…む、ちよつと待て。今、思いつきり手加減する宣言したよな？
もう既にしてもらってるのに、そんなハンデ貰えねえよ』

『なーに言ってるのさこのヒヨっ子め。そもそも、こんな僕に対し

て今からそのデカイ刀で遠慮なく斬りつける気だろう？もし一夏が強いなら、刃を当てないように闘うことぐらい余裕でしょ。できるの？』

『いやいや！お前に対してそんな加減できるわけないだろ！千冬姉ですらないぞそんなこと！！』

『え、その発言は割りとショックだなあ。…まあ、戯言はこれくらいにしようか』

そう言って、上空の一夏へ手を差し伸べるように延ばし——零夏はニヤリと笑って、言った。

『僕に剣を抜かせると言うなら——強くなるんだ』

分かり易い挑発だ、と一夏は思う。けれど、彼にとってその言葉は心地いいものだった。

箒との特訓で、自分が怠けていたことはわかっている。零夏の言葉は正しいのだ。今の自分は周りの誰よりも底辺に居て、だから彼の敵にすらなれていないのだと彼は思う。

——でも。

——ここがドン底なら、この先は這い上がるだけだ。

『ハッ——上等おおおおおおおッ——！』

兄の言葉に応えるように、満面の笑みを浮かべながら一夏は叫んだ。

同時に、『白式』を地面に——零夏のもとに、加速させる。

最初の一撃は肝心だ。だから、今の俺の全力を振るう。そして、その次の一撃は先程の『全力』よりも強く振るう。そうすれば、いつか『戦場』に辿り着き、いずれかは他の皆に、箒に、千冬姉に——そして、零夏に届くはずだ。

だから応えろ、と一夏は強く念じる。この一瞬にも、視界の端に映るデータは彼に最適化されていく。それでも足りない。彼には届かない。もっと、もっと強くなりたいと、彼は願う。

『——行くぞ、白式いいいいッ——！』

接近しながらブレードを振りかぶる一夏に対し、零夏はその場を動かなかった。

ただ拳を構え、ギシリ、と全力で力を込める。

彼は、自分のことを強いと思ったことなど無い。力は借り物で、思考は偽物。こと戦闘に関して強いのは『自分』でなく『彼』であり、ただ力だけ手に入れてしまった自分はひどくチグハグだ。

こうしている今も、心は力に溺れてしまいそうになる。自分には力があるのだ、と。それを使えば全ては思うがままだ、という欲が溢れ出しているのを、僕は必死に抑えつけている。——ああ、こんな気分になるから、戦うことは嫌いなんだ。

だからこそ、一夏には強くなつてほしいと思う。自分とどこか似ている弟に、『力と強さは別物なのだ』と教えてやりたい。

だから、零夏は呟いた。

『——行くよ、ヘラクレス……!』

自分は、英雄ではないのだと。

一夏が迫る。白になろうとする刃が振り下ろされる。

零夏が迎え撃つ。英雄になるまいとする拳が振り上げられる。

そうして、互いの刃と拳が、激突し――

――戦いの火蓋が、切って落とされた。

L i f e 6 強さの在り処、強者の在り方（後書き）

推敲終わり。誤字だらけでした。…後書きも含めてな！自分を殴りつけたいでござる。

さて、本編の話ですが…束さんのチート発明の原理についてはツツコミ禁止です。もうアレはそういうものなんだと思ってください。『令装』の外見についてはバサカというよりホロウのアヴェンジャ―みたいな服装（のタイツ版）をイメージして下さればと。コスプレですな。

今回の話では『強さ』がテーマでした。一夏にとって零夏は千冬さんと同じくらいに『強い』存在ですが、零夏は自分のことなんて全然強いなんて思ってません。人の認識の差というものですな。

ちなみに、一夏がなんで零夏を強いと思ってるかは色々理由がありますのでこの後の展開をお待ちください。姉さんとの勝負云々も然り。

で、今回の話で語られている『ISの初期設定すら終わらせていない一夏は弱い』という言い回しですが、これは一夏が弱いという問題ではなく、LV10のキャラクターがLV1（初期状態）のキャラのことを『力不足だ』と言っているイメージで書いたつもりなのですが…伝えられているでしょうか。

零夏がやるうとしているのは、『オマエもう経験値は溜まってるんだからさっさとかばたんのトコ行って能力上げて来い』ということですね。逆にわかりづらいか…

ちなみに、先程の認識の違いの話をLVで例えると、零夏は自分のことを『LV10のくせにチートで能力だけ上げたヤツ』、というように捉えていますが一夏にとっては千冬さんと並んで『LV99

の最強キャラ』です。

『自分は強くない、力があるだけだ』というのは転生チートモノで僕がよく考えることのひとつです。

今回の話は『力を手に入れた人は、自分のことをどう思うんだろう？』という疑問がテーマですね。

俺TUEEEの展開も僕は好きですが、自分に自信が持てない人間は強すぎる力をどう思うのでしょうか。

零夏が武器を取り出さないのは、本当に一夏への手加減だけが理由なのでしょうか？

なーんてことを書きまくっていたせいで8000字も書いたくせに戦闘パートを終わらせられませんでした。

俺のバカ野郎があ！短くまとめる能力が欲しいです。

ところで、非常にどうでもいい話なんですがFate/zero非常に面白いです。ウェイバーさんの可愛さ、ライダーのかっこ良さ、アサシンの踊りっぷりなど見所がありますね。

作画も演技も一級品です。明らかな名作になることは間違いないでしょう。

でも何よりもイリヤが可愛いすぎだろオオオオオオオオ！！キリツグズルしてたーとかよおおおおお！！もう可愛くて死ぬようごアアアアアアアアア！！

そんなFate/zero、ご覧になっていらっしやらない方は是非ご視聴をお勧めいたします。本当に面白いですよ！

L i f e 7 全て超えるのなら、白になれ（前書き）

遅れました。まさかの一万六千字です。自己最高記録や…！！

さて、今回アンケートの途中経過を集計してみました。

「○○か××がいい」的な票はそれぞれに追加したので実際のアンケート数より票が多いです。

- ・のほほんさん33
- ・束さん17
- ・会長10
- ・姉さん8
- ・山田先生5
- ・ハーレム14（以上）

…のほほん神T U E E E E E E ！！

うーむ、多分このままいくと彼女の単独ヒロインになりそうですね。とはいえ、他のキャラの出番が全く無くなるということでは無いんですが。

それにしても会長は意外と健闘しておりますね…まだ出てないのに。次
の話でテコ入れ入るのに。やはりのほほんさんの影響なんでしょう
か。

あと、束さん『と』のほほんさんが良いです！的な票も目立っていました。

ハーレムは実際のところ20近く票を集めてたんじゃないでしょうか。…しかしハーレムに関しては意見が完全に割れていましたね。

これについては改めて皆さんに意見をお聞きしておくべきなのかもしれません。

ぶっちゃけ、ハーレムか否かどっちだと想いますか？

アンケートは次回の投稿までを期限とさせて頂きます。

L i f e 7 全て超えるのなら、白になれ

「……そろそろ、始まった頃でしょうか」

同時刻、学生寮――

世界初である『男性同士のISによる戦闘』を見るためにほとんどの生徒が出払っている中、唯一自室に残っていた少女、セシリア・オルコットはそんなことを呟いた。

何故彼女がここに残っているかという点、今回の3人の模擬戦において、彼女は初日は戦闘を行わず、二日目にまとめて男子2人と対戦することになっているためだ。

そのため相手の情報を一方的に入手しないように、彼女は千冬から2人の試合中は自室で待機していることを命じられていたのである。

勿論、彼女は努力でその実力に至った『代表候補生』だ。決闘においてそのような『卑怯な手段』を使う気はまったく無かったが――
――妙な疑いをかけられトラブルを起こすことも無いだろう、とおとなしくその指示に従い……こうして今に至る。

しかし――この待機時間は、彼女が思っていたよりも案外暇であった。

（静かですわね……一体、どれほどの人数が試合を観に行ったのやら）

『男子』というものがそこまで珍しいものなのだろうか、などと

思い…世界に2人しかいないのならば当然か、などと思い直した。
同時に、あの2人の顔を思い出してしまいセシリアは自分の眉間に皺が寄るのを感じる。

「あの野蛮人、それにヘタレ男…!!」

唇を噛みながらセシリアは唸る。

男子のことを考えるなど普段の彼女ならば到底考えられないことであつたが——やはり、何だかんだ言っても明日は彼らとの試合だ。時間が余っている自室待機ということもあり、消そうとしてもセシリアの頭の中には織斑兄弟の顔が浮かんできて、余計に彼女を苛立たせた。

ちなみに彼女の中の零夏のイメージは『フヒヒ!あの美少女僕の言葉に騙されてやがるお!』などと陰口を言う、本人が見たら割とシヨックを受けそうな気持ち悪いキャラである。

そんな(彼女の勝手な)脳内イメージ2人を『すみませんでしたあ!お詫びに我々を足拭きマットとしてご利用ください!』などと言わせることで屈服させ、ようやくセシリアは一息ついて——気分を入れ替えるために、紅茶を淹れることにした。

自身のものである巨大ベッド(特注品。ちなみに導入の際ルームメイトは静かに泣いた)から腰を上げ、台所の食器棚からティーセツト一式を取り出す。

茶葉を取り出そうとスプーンを掴み上げて——ふと、セシリアは唐突に零夏の言った言葉を思い出した。

『——君に答えを出すのは僕の役目じゃない。一夏の役目だよ』

……あれは一体、どんな意味を持っていたのだろう。

適当に話をはぐらかしていたあの男は、どうしてだか判らないけれど……あの一瞬だけは、セシリアの方を真っ直ぐ見ていた気がした。

けれど、織斑一夏はそもそもISの基本的な知識すら欠けていて、そのくせ試験で教師を倒したなどと言うから——結局セシリアは、零夏に尋ねた『貴方にとってISとは何なのか』という質問すらできぬまま、今に至っている。

「……織斑一夏は、私の望む『答え』を持っていますの……？」

正確には——零夏が持っていない、というのが正しいのだが、それを知らぬまま、セシリアは思考の海に沈む。

彼はどのような気持ちでISを持っているのか。力に吞まれているのか、それともそこで止まらず、今も進み続けているのか。

どうか見せてほしい。そして教えてほしい。

死の際に母と一緒にいた父は、どのような思いでいたのか。父は強かったのか、弱かったのか。

彼女は心の奥底で望んでいるのだ。どうか、自分の傲慢を壊してほしい、と。本人は気付かないままに、何も知らない相手に、縋る様にしながら。

——彼女は気付かない。自分自身が『父親』のことしか見ていないということに。

一夏や零夏に向き合うことをせず、ただ自分の身勝手な幻想を押し付けているということに。

「……どうして、こんなことに期待しているのでしょうか。ただ、彼らは『最初に動かした男』である。それだけですわ」

その間違った想いが。

彼女が最も嫌う、『人の誇りを損なう』行為が——とある少年に碎かれ、姿を変える時は——もう、すぐそこまで迫っている。

その足音に気付かず、彼女は上を向いて、呟く。

「——今、あの2人を見に行っている人の中で、『強さ』を期待している人など、ほんの一握りでしょうに」

セシリアの言う事は間違っていなかった。

零夏と一夏、2人の試合は観客席を埋め尽くすほどに人を集めていたが——実際に彼女達の中で、彼ら個人のことは見ている者達はほんの僅かであった。

ただ、『男』だから。

ある者は物珍しさから。またある者は流行の会話についていくため、そしてまたある者は単なる暇つぶしに——少女達はただ、そこに来ていただけだ。

一組のほとんどの女子たちもそれは変わらない。彼女達はISについて学ぶためにやって来た。『代表候補生』というものの強さも判っていて、だからこそ一夏を『無謀だ』と笑い、零夏の内心『巻き込まれた気の毒な人』などと思っていた。

そう、思っていたのだ。

目の前の光景を見るまでは。

ドゴオオッ！！という爆発音が響く。

あまりの衝撃に、地面の一部が吹き飛んだ。

『ぐ、おおおおおおああッ！！』

衝撃を受けて、一夏が叫び声をあげる。地面と対応するように、白い機体は空中へ吹き飛ばされ、きりもみに回転しながらも急停止しようとする。

拳と剣の激突の結果、助走をつけて全力でブレードを撃ち込んだにもかかわらず、力負けしたのは『白式』の方だった——その事実、観客席の少女達が驚きのあまり言葉を失う。

反動で空中に投げ出され、強烈なGに視界を明滅させながらも——即座に体勢を立て直し、一夏は地上の方に向き直り、土埃が舞っている場所にいるであろう『ヘラクレス』を——兄を、睨み付ける。

その口元には、獰猛な笑みが消えることなく張り付いており。恐らくは兄のほうも同じ顔をしているのだろう、とそこにいる全ての人々が思った。

異様な程の静寂が、セカイを満たす。

誰も、一言も喋れずにただ——目の前の試合に視線を釘付けにされていた。

この戦闘が始まってから僅か数秒で、彼女達の頭の中から『男だから』などという興味本位の理由は吹き飛んで消滅している。それ

だけの光景が眼前には広がっていた。

砂煙の中で、ゆらりと人影が揺れる。
それだけで、少女達の身体が震えた。

覆い隠す砂の粒子が、彼の、織斑零夏の姿を曖昧にしていくのを見て、誰かがごくりと生唾を飲み込む音がする。

自分達が、御伽噺のような『神秘』に吞まれていくような錯覚の中——彼の存在感に塗りつぶされるように、一人一人が、巨人の姿を幻視した。

常識が崩れていく。幻想が目の前に顕現する。

誰もが信じられない現実を否定しようとして、それが出来ないことに気付き愕然としている。それ程までに信じられない事実が、容赦なく目の前に突きつけられていた。

——ヒトガタが、ISを超越している。

誰もがいつか望んで、常識に、現実にかけて諦めていったユメ。それが今、目の前にある。

子供の頃に描いた憧憬。抱いていた幻想。これはIS同士の対戦で、ただ片方がカタチを持たず人間のまま戦っているだけだと頭の中では理解しているはずなのに——誰もが、その姿に見惚れていた。

あの時の憧れをそれでも忘れられなかったから。あんな風に、英雄^{ヒーロー}のようになりたかったから——自分達は、ISに乗ろうとして

いたのではなかったか。

『ヘラクレス』。

形が無い、というそれだけのことが特徴の筈だったISは今、少女達にまったく別の衝撃を与えていたのであった。

そんな中。

ほぼ唯一、観客席の中で存在感に吞まれていない一人の少女は、笑顔さえ浮かべながらその試合を観戦していた。その神秘を彼女がすんなり納得できたのは、いまだ短い期間なれど、彼女が少年のことを少しづつ理解していたからだろうか。

そんな彼女も、言葉を発することは無い。……彼女もまた、この光景に胸を高鳴らせている一人だった。だから、水を差す一言などには要らない。そんなことをしなくても、応援することは出来ると彼女は知っていた。

（——頑張れ！れーか君！！……うーん、ニツクネーム普通になっちゃったなあ）

それは、彼女が零夏と共に過ごして、その力の片鱗を知りながら——なおかつ確かな信頼と期待を、ルームメイトに寄せていた故に。

最初の朝に聞こえた、彼の独白。あれほどの力を持ちながら、ソレに吞まれず『自分自身』であり続けようとしている姿をただ、布仏本音は凄いと思ったのだ——

『ふーむ。流石に剣をそのままブン殴ると結構減るね』

砂埃の中で呟いた兄の独り言の声が——ISを通じて、まるで耳元で言われたかのような明瞭さで一夏に届いた。

彼の言うとおり、お互いのエネルギーは一夏が785、零夏が540。開始は800だったことを考えると数字の上では一夏が優勢に見える……が、実際は当然そうではない。そもそも、素手での戦闘は零夏にとって、ただのシールド性能の確認に過ぎないのだからその証拠に、彼の台詞には油断こそカケラも無いが——やや『余裕』が含まれている。その事実にブレードを強く握り締めながら、『弟』である彼は改めて、底知れない零夏の実力を痛感していた。

（強い……ッ！ー！）

今のは自分にとって完璧な一撃だった。にもかかわらず、こちらの剣は相手の拳に打ち負た。

それはつまり、零夏という存在はそれほどに遠い位置に立っているという証明に他ならない。いや、それとも——これは自分がまだまだ未熟だという証拠だろうか。どちらにせよ、一夏がまだまだ彼に追いつけていないのは確かな事実だった。

足りない。何もかもが。

ならばもっと速さを。もっと力を——そう、一夏は望む。今、彼にできるのは愚直なまでに剣を振るだけだった。迷う必要も止まる理由も存在しない。

だから、一夏は再び零夏に向かって加速した。

土煙の中であろつと、ISのセンサーはその姿をハッキリと捉える。一夏の専用機としてそのカタチを最適化しながらも、白式は詳細なデータと計算結果を提示した。

距離接近、接敵まで残り0.7秒。目標は移動せず。

（届かなくても諦めねえッ！何度でもやってやる！！）

——白式が視界に表示した情報に従い、攻め入るための完璧なタイミングで彼は零夏に剣を振り上げ、

『じゃ、力は十分判ったから——次だ』

たんっ、という軽い音が聞こえた。

ハイパーセンサーがアラートを鳴らすのと、一夏が驚愕に目を見開くのと——どちらのほうが早かったか。それ程までに一瞬の出来事だった。

先程まで動いていなかったはずの零夏が、目の前に立っている。

『な……ッ!!?』

移動の兆候は無かったはずなのに、何故——!?

予想を裏切る目の前の光景に、思わず一夏の身体が硬直する。

そして、それは戦闘では致命的な隙である、と一瞬遅れて彼は気付いた。

だが、目の前の存在はその硬直を見逃す程、甘い存在ではない。

ほんの一瞬が引き伸ばされるような感覚の中、流れるような動作で零夏は拳を引き絞る。

一夏は硬直したまま、その一連の動作を成す術もなく——いや、むしろ動きに魅せられるように——見ていることしかできなかった。

『——油断は禁物、だね』

細い腕から放たれた、鋼鉄をも砕く一撃。

それは吸い込まれるように腹部へと叩き込まれ、凄まじい衝撃と共に、白式を再び吹き飛ばす。

『ぐ、おおおおああああッ！！！』

——警告。胸部装甲破損、損傷拡大！——

ISの防御を貫通した痛みに叫び声を上げながらも、一夏は白式の警告メッセージが表示されるのを視覚ではなく、感覚で理解した。ISと自分が同一になっていくような高揚感^{ファースト・シフト}は、一次移行が進行している証だろうか。

凄まじい速度で流れていく視界の中、それでも強引に機体を動かし姿勢を取り戻そうとする。ギシギシと身体が軋む音が確かに聞こえたが、それら全てを無視した。ISの補助が無ければとくに気絶しているほどのGに耐えつつも、それでも彼の顔から笑みは消えない。

(——やっぱり凄えな、零夏は——！！)

そこに込められているのは、兄への惜しみ無い賞賛だった。

零夏のことをずっと近くで見っていたのは、誰よりも弟の一夏だ。今戦っている兄のことを、この場の誰よりも——あの千冬の想いさえも越えて、一番誇りに思っているのは自分なのだ、と一夏は思っている。口には出さないけれど、姉と同じかそれ以上に——兄として、織斑零夏は一夏の憧れだった。

だからこそ、自分も、アレに追いつかなければならない。その名前を傷付けないために——守られる弱い自分から、誰かを守る自分になるために。

改めて、一夏は一瞬で遠く離れた零夏を見据える。
彼は動かない。ゴキゴキと拳を鳴らして調子確かめつつ、獣の
ような笑みを湛えながら、零夏は一夏を待っていた。

『——次は技だ。ほらほら、かかって来なさい』

零夏が言った明らかな挑発。

その言葉に込められた想いは侮蔑ではなく、弟の成長を望む兄と
して——手伝ってやる、という意思表示だった。

発言の意味を正しく理解して、そのスパルタっぷりに思わず苦笑
を漏らしながら……一夏はブレードを構え直し、改めて零夏に向き
直った。

そして、深呼吸を一回だけ行ってから——腹の底から声を出し
て、叫ぶ。

『いくぞ、零夏あああつ!!』

瞬間、爆発するように白式が加速した。

彼との距離を、少しでも縮めるために——少年は、何度でも剣
を振るう。

「……すい」

ぼつり、と真耶の声がピットの中に響いた。

声にこそ出さないが、無言で残りの2人もその発言を肯定した。

千冬は僅かな笑みを湛えているのに対し、箒は呆然としているという違いはあったが。

とはいえ、台詞が感嘆に満ちているからと言って、真耶が観客席にいる少女達と同じように零夏の存在感に吞まれていた、というわけではない。元『代表候補生』として、また教師として、彼女が目していたのは彼らの『実力』についてである。

「零夏くんは一体どこであんな技術を……？それに、一夏くんの方も凄い成長スピード……」

「確かに、あいつの動きは段々キレが良くなっているな……白式を使いこなし始めた、ということか」

2人が会話している間にも、専用の機材が詳細なデータを割り出しそれぞれのISの推定出力などを算出している。彼女達の目の前にあるモニターでは、詳細なデータやエネルギー残量と共に、零夏と一夏が鎧を削り合う光景が写っていた。

2人の戦いは、最初の威力を競うような戦闘から、武道の稽古のような『打ち合い』へとシフトしている。通常の武道と違うのは、片方が素手で、それでいて相手を完全に圧倒しているということだ。

一夏の横斬りを、零夏は屈んで避ける。

『白式』の袈裟斬りを、『ヘラクレス』がブレードの腹を殴りつけることで逸らす。

弟の不意を付いた回し蹴りを、兄が同じように蹴り飛ばす。

人間の反射速度の限界を超越した世界の中で、零夏は一夏の攻撃を紙一重で回避しつつ、避けきれないものは拳で軌道をずらして立ち回っていた。

ISの性能だけではなく、技術という点でも零夏は一夏を越えており———それどころか、千冬から見ても零夏は、世界大会に出場していた数々の猛者に匹敵するレベルの戦闘能力を有している。

いまだに武器を使用していないにも関わらず、である。

「……ISだけじゃない。これは、零夏自身の強さ……？」

呆然と呟く筈をちらりと横目で見ながら、千冬は真耶との会話を続ける。

「だが、やはり零夏の地力がずば抜けているな。まだまだ一夏では届かないだろう」

「そうですね、残念ですけど………そういえば、二回目の一夏くんの突進の際、『ヘラクレス』はまるで、瞬間移動のような動きをし

したよね？あれはどういった原理なんでしょうか？」

「原理、という程でも無い。……零夏はただ単純に、反応できない程のスピードで踏み込んできただけだ」

「ええっ！？ど、どう見ても消えてましたよ！？私はてっきり、高速移動する単一仕様能力なのかと……」
ワン・オフ・アビリティ

そう、零夏が先程行ったことはただの単純な『踏み込み』だった。しかし——あらゆる戦闘で基本であるはずのその行為は、余りにも高度な『技巧』と『速度』で行われることにより、人間の目では捉えられない程にまで到達したのだ。

まるでフィクションの世界だな、と千冬は一瞬考えて、ISも登場する前はSFの産物でしか無かったことを思い出した。

（まったく、束が絡むと口くなこと起こらないな……）

とはいえ——人間の目で捉えることはできなくても、ISのセンサーで感知することは本来なら可能だったはずだ。それを一夏ができなかったのは、本人が反応に追いつけていないか、もしくは白式が情報処理しきれなかったかのどちらかだろう。あるいはその両方だろうか。

ファースト・シフト
恐らく、その問題は一次移行を完了させれば解決するだろうが……その時こそ、零夏は彼自身の持つ『武器』を取り出すのだろう。

戦い続ける弟達をモニター越しに見ながら、千冬はふと、昔のことを思い出した。

遠い日の思い出。

膝をつく自分と、それを驚愕の眼で見ている一夏。そして……寂しそうな笑顔を浮かべた、零夏の姿が、蘇る。

あの日戦っていたのは零夏と自分で、一夏はただ見ていただけだった。その記憶から数年が過ぎて——自分と一夏は変わったのに、零夏は何も変わっていない、ということを千冬は実感する。

そう、あの時に『勝者』だった零夏は確か、『敗者』である自分にこんなことを言っていた。

——僕はどうしようもなく弱いんだよ、姉さん——

「……やれやれ。いつになったらあいつは気付くのやら」

「？ 織斑先生？」

真耶の呟きには応えず、千冬は映像の中の弟を見る。そこには、圧倒的な力を持って佇む零夏がいる。その姿は英雄ヒーローのように堂々としていて、観客席にいる女子からはさぞ格好良く見えているのだろう。

だが、千冬は知っている。零夏は本当は臆病で、穏やかに過ごすのが好きで、戦いなんてしたくない性格の持ち主で、中身はどうしようもないヘタレで、格好悪くて、人をからかって遊ぶのが趣味のような少年なのだ。

そのどちらも、織斑零夏だ。

そんな当たり前のことを——普段から自分自身に言い聞かせているくせに——彼は実のところ、まったく判っていない。

「『力』だけで私に勝てるものか。もつと堂々としている馬鹿者め」

勝負というものは、敗者が負けを認めたからこそ成り立つのだと彼女は思っている。

だから、決して口には出さないけれど——心の中で、千冬は零夏に言っただけで済んだ。

——お前は弱くなんてない。

『世界最強』の、この私が保証してやる——

どれくらいの時間が過ぎただろうか。

不意に——ひたすら剣を打ち込んでいた一夏の動きが、止まる。

僕はその硬直に気付いて——しかし攻撃はせず、バックステッ
プで大きく離れることを選んだ。

ズザ、という音を立て、お互いの距離が10メートルほど開く。

「……ようやく、かな？」

『ああ。待たせたな』

眩いた僕に應えるように、静かに一夏は眼を閉じた。

ゆらり、と空間が揺らぐ。眼を閉じたはずの彼の視界にはきつと、

白式の『言葉』が届いているのだろう。

フォーマット フィッティング
初期化と最適化を完了。

もう大丈夫、やっと貴方と戦える——と。

『——白式、展開ッ！！』

一夏が、宣言する。

それと同時に、その身体が光の粒子に包まれ、どことなく褪せたような白色だった装甲が、分解され別の……いや、『本来の形』に組み換えられていく。僕が殴り壊した装甲も修復され、ただ純白に染め上げられていった。

ファースト・シフト
そうして、一次移行は完了する。

ブオンッ！と調子確かめるように剣を……『雪片式型』を軽く振るい、一夏はゆっくりと眼を開けた。

——『白』だ。

先程までの工業的な凹凸は消えて、どことなく西洋的な鎧を思わ

せるフォルムに変化した白式に感じた印象は、その一言に尽きた。
先程まで僕が感じていた中途半端な感覚は消え去って、刃のような鋭い気配がこちらに伝わってくるのを感じる。

「……おめでとう、と言うべき場面なんだろうね、これは」
『何言ってるんだよ、ここがスタートラインなんだろう？ 零夏が言っていた意味がわかったよ——確かに、さっきまでの俺は『戦場』に立ってすらいなかった』

強く笑って、一夏は言う。

ようやく、白式は一夏の『専用機』になったのだ。彼にしかわからない嬉しさを感じているのだろうか？ 恐らくは、僕がその想いを一生感じることは無いだろう。ISは、女性と一夏にしか使えないものだから。

そうして、達成感を纏った弟に軽口を言いながらも——僕は、自分の表情が緊張で強張っているのを感じる。

前座は終わり、彼は本当の戦場に立った。……それはつまり、僕もまた紛い物ではない『戦場』に立たされたことを意味していた。
今から始まる戦闘は、先程とは比べ物にならないくらいに僕の『死』への恐怖は増すだろう。

手加減している状態では対処し切れなくなつて、一夏を傷つける可能性が増した、という意味でもあるし、何より——

魂が、警鐘を鳴らしている。

アレは——『雪片式型』は、己を傷付け得るものと。

僕の身体は英雄の力を手に入れてはいるものの、決して『サーヴ
アント』になっっているわけではない。

霊体として行動することは不可能だし、聖杯が与えた『狂化』な
どのクラス別スキルも存在しない。最も大きな特性である『物理攻
撃を無効にする』という効果も、人間の身である僕には与えられて
いない。

つまり、現代の兵器でもAランクに届いていれば、『ゴッドハンド十二の試練』
を突破し僕を殺すことは可能なのだ。

そして、目の前の雪片式型とその能力『零落白夜』はISという
兵器の中でも最強の攻撃能力を持ち、恐らくその攻撃はAランクに
届くであろう代物だ。それが何より、僕は恐ろしい。

どれだけ強くなっても人が刃物を恐れるように、心が勝手に拒否
反応を起こす。目の前にいるのは弟だというのに、トラウマが蘇り
そうになり、逃げ出したいという恐怖が湧き上がってきた。

ああ——なんて、無様だろう。

結局、こんなチートを持っけていても僕のココロは臆病なままだ。
強さの頂点に辿り着いた姉さんと、目の前で駆け上がるように強く
なっていく一夏を見ていると、自分が違うということ強く自覚し
てしまった。

『けど、こうして向き合って改めて思うよ。零夏はやっぱり強いっ
てさ』

一夏の言葉に、思わず苦笑が漏れる。

その眼に映っているのは、本当は僕じゃない。ヘラクレスという名前を知らない者がいない程の英雄のものなのだ。物語の主人公のように、それを気にしない程傲慢でいられれば、あるいは僕の在り方も違ったのだろうか。

「一夏。僕は――」

そんなことを思いつつ、僕は一夏の言葉を否定しようとして、

『――「どうしようもなく弱いんだ」、だろ?』

思わず、息を止めた。

『あー、やっぱりそう思ってたろ?前に千冬姉と戦った時もそんなこと言ってたしなー』

からからと笑いながら、一夏は言う。

対して、僕の身体は硬直していた。台詞を言い当てられたから、というのもそうだけど、一夏が何故そんなことを言い出したのかが理解できなくなったからでもある。

一夏はさっき僕のことを『強い』と言っていた。けれど、今の台詞当ては僕の内心を理解しなければ分からないことのはずだ。自分の弱さが嫌いな僕に、どうして一夏はそんなことを言うのだ。それ

が、全く僕には理解できなかった。

「そんな昔のことを……覚えてたんだ」

「忘れねえよ、あんなの見せられたら。今俺たちを見ている人達と同じだ。……なあ、零夏」

「……なんだい？」

「零夏はさ、きっと束さんがTVで言うずっと前から、『ヘラクレス』のことは知ってたんだろ？」

「そうだね……少なくとも、自分に力があることは知ってたよ」

「あ、やっぱりそうなんだな。……うん、だからだ」

よく、わからない。彼は何を言いたいのだろう。

まだ愚問が解けない僕に、困ったように笑いながら一夏は言葉を重ねる。

「俺さ、中学に入ってから三年間、ずっと剣道やってなかったせいで、色々な勘とか全部抜けちまったんだ」

「それ、箒ちゃんに言われたんじゃない？」

「……う。ま、まあとにかく、力を持続けるならずっと鍛錬してなきゃいけないんだ。で、今見て分かったけど、零夏はきっちり自分の力を使いこなしてた。つまり、それだけの鍛錬を零夏はしてたんだろ？」

確かに、僕はある程度身体を動かしたりはしていた。

戦闘経験があってもそれが現実に行われたものではない以上、どんな力を持っているかくらいは確かめなければならないというものもあったし、身体を動かすのも嫌いではない。束さんに色々バレてからは様々なヘンテコ訓練をしたりもしたが、今はその話は置いておこう。

『だから分かったんだ。零夏はずっと変わら……ない。それは凄いことなんだってようやく今、実感できた』

確かに、僕は変わってない。でも結局、それは何もしていないっていうことだ。『劣化』はしていないかもしれないけれど、『成長』もしていない。ただ変わらない日々を求めているそんな僕が、どうして強いと言われるんだろうか？

『ああ、そこだよな。零夏はさ、勘違いしてるんだよ』
「……勘違い？」

簡単な話だろ、と一夏は呆れたように——けれど胸を張って、僕に言った。

『——力なんてなくなたって、零夏は元々強いんだ。弟の俺が保証するよ』

きつと、千冬姉も同じことを言うぜ、と一夏は言葉を締めた。
力はただ力であり、それが強さを決めるわけじゃない。僕が教えるまでもなく、一夏はそれを理解していたのだ。だから——英雄の力がどうかじゃなくて、僕の在り方、それこそが強いのだと彼は言った。

それを聞いて、僕はどんな顔をしていただろうか。

……今の言葉が、本当に真実なのかは分からない。

そもそも、たった一つの言葉で、僕が今まで感じてきた想いが全て変わっていくわけではない。今でも僕は自分のことを弱いままだと思っているし、実際に力のない僕を一夏や姉さんが見たら幻滅する可能性だって十分に在り得た。

でも。

それでも、僕は。

『ヘラクレス』でなく、織斑零夏の強さを——誰かが認めてくれたのが、嬉しかった。

『死』から逃げ出している自分を肯定してくれたことに、救われた。

強くなかったって、日々が平和ならそれでいいと思っていたはずなのに、どうやら僕は救いようのないバカで、欲張りだったみたいだ。一夏に言わせれば、『男なんだから当たり前だろ』なんて返されそうだ、と苦笑する。

その笑いはたぶん——さっきのような、マイナスなものではな

かった。

織斑千冬の弟として、織斑一夏の兄として、その名に恥じない——
——プラスの笑顔だったと思う。

『——ははっ。やっぱり、一夏は強いなあ』

静かに、零夏は呟いた。

いつの間にか、身体の震えは止まっている。ひよっとすると、こんな気持ちでいるのは今、この時だけかもしれない。試合が終われば元通りになるのかもしれない。

それでも——今の彼は、死に怯えることなく、まっすぐ立ち向かっていた。

『主人公体質ってヤツかな？漫画の世界に行けば、並み居る敵をなぎ倒して生徒会長になれたりするかもね』

『なーにバカな話してんだよ……現実とフィクションを一緒にすんな』

『ダウト』

『え！？何が！？』

軽口を言い合いながらも、一夏は目の前の兄がどこか変わったことを察する。

自分が今、ようやくスタートラインに立ったように、零夏も『何か』を始めるようとしているのか。ともかく——これからが、彼の『本気』であることは間違いない。

『雪片式型』を正眼に構える。

一夏も零夏も、エネルギーの残量はそこまで残っていなかった。『ヘラクレス』がエネルギーを減らしているのは恐らく、素手できつちり剣を弾いていても、完全にダメージを削ることはできなかった、ということだろう。

勝負の決着は、じきに付く。
それを全員が理解した。

『……英雄ヒーローになんて、ならなくていいんだ』

不意に、零夏がぼつりと言葉を漏らす。
呟きながら、ゆらりと左腕を真上に掲げ、翳すように空に向ける。

『偽物でも、模造品でも構わない』

そのまま左腕に右手を添えて、彼は何かを持ち上げるような構え

を取った。

まるで空を掴むように。天にナニカを求めるように。

『ただ、僕は——一夏の兄でいるくらいには、強くなるって、決めたから』

言葉に応えるようにして、零夏の纏っていた空気が、変わる。

(……なんだッ!?)

ISのセンサーよりも先に、一体の人間として——織斑一夏は、その違和感に気付いた。

世界が軋む音。

「これは…ッ!？」

「き、機材の故障ですか!？」

「違う! 計器に異常はない… けれどどこか、反_レ応してすらいないだと…!？」

一夏と同じように、ピットの中の三人もその現象に驚愕する。彼女達の目の前のモニターでは確かに異常が起きているのに、最先端の計測器は何も感知していない。明らかに、現代の科学では説明できない光景が広がっていた。

『現実』が、歪んでいる。

言葉では形容できない、常識を超越した光景だった。

零夏の翳した手が『世界そのもの』を侵食するように、何かを削るような異音を出しながらその場所だけが歪んでいた。

ISの自己進化のような、『空間が歪む』ような現象とは、全く別のモノだと千冬の知識は訴える。だが、彼女にわかるのはそれだけだ——それ以外のことを、一切理解できない。

『ヘラクレレス』が発していた存在感を、何十倍も圧縮したような——自分の知る世界を根本から破壊してしまいそうな感覚。今まで生きている中で、ソレの意味を理解できるものは、篠ノ之束を含めても存在しないだろう。

これこそが、『魔術』——いや、『魔法』。

——科学とはまったく違う概念。この世界では消え去ってしまった最後の幻想。ラスト・ファンタズム人類がどのような技術を用いても再現できない奇跡が今、目の前に顕現する。

神の遺産。人々の祈りの結晶。呪いの証。

とある世界の魔術師は——それを、『宝具』と呼ぶ。

その歪みがやがて消失し、世界が元の色を取り戻してもなお、一夏の思考は、完全に停止していた。

それほどまでに、目の前の光景は理解を超えていて、見惚れてしまったものだ。

先程の構えのまま、零夏の手には剣のようなナニカが握られている。ような、としか表現できないのは、その形状があまりにも現実離れしていたからだ。

それは、剣というにはあまりにも大きすぎた。大きく、ブ厚く、重く、そして大雑把すぎた。

それはまさに——『岩塊』だった。見ているだけで潰れてしまいそうな神秘を持つ、斧剣とでも呼ぶべきジャンルのその武器の真名を……零夏は、静かに口にした。

『——
ナインライフス
射殺す百頭』

その名が示すのは、英雄ヘラクレスが扱った、数多くの武器。それら全てを一つにし、『状況に応じた最適の武器を具現化する』という概念武装——

その内のひとつが、この斧剣だった。

自分の持つ雪片よりも巨大な、人の身には余るであろうその斧剣は、しかし零夏の手完全に馴染んでいる。

何も知らない一夏でさえ、一目見て理解した。——ああ、あれは彼の剣なのだ、と。

『……一夏。今から僕は、この世界に生まれて初めて本気を出す』

零夏の言葉に、一夏は一気に現実に戻される。

同時に、兄の言葉の意味を理解し、身体を震わせた。

『——受け止めてみせる——!!』

その震えは武者震いか、それとも恐怖によるものか。——考え

るまでもない。

『武者震いに決まってるだろッ!!』

叫び、剣を握る力を強めた。

強く強く、己の全力を——いや、それ以上の、白式の力も含めた自分の中のエネルギー全てを彼は剣に込める。空を飛ぶエネルギーさえも剣に注いで、一夏の脚が地に付いた。

所有者のその意志に反応して、『雪片式型』の実体剣の部分が粒子を出して消失し——エネルギーで構築された、白い刀身が現れる。

——【零落白夜】、使用可能——

白式のメッセージを視界の端に捉えながら、真っ直ぐ一夏は零夏を見る。

彼の手にあるソレは、かつて織斑千冬が使っていた剣。

世界最強たる現代の英雄の剣と、神話の時代の最強たる英雄の剣が今、時を越えて並んだのだ。

——何度目かの、けれど最も短い、痛いほどの静寂が訪れる。

千冬が、箒が、真耶が、本音が、全ての人々が呼吸を忘れた。決着一瞬を逃さないために、まばたきすら停止させる。

そして、

同時に、兄弟達は踏み出した。

『う、おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！！！！！』

『

極光の白剣と、巨大な斧剣が振り上げられる。

膨大なエネルギーが、絶大な魔力が、奔り、ぶつかり、火花を立てて、収束する。

10メートルの距離は一瞬で消失した。

余りにも眩い白光も、体中を襲う衝撃すらも無視して、零夏と一夏は相手の顔から目を離さずに、全ての動作を完了させる。加速したスピードを足した、人智を超えた攻撃力が狭い空間に集中した。

振り下ろす前から——間違いなく、これは人生最高の一撃だと2人は同時に確信する。

そしてまた、これから先、この斬撃を超えるものがあるとしたら——それが生まれるのは、きっと同じ相手なのだろう、と兄弟は思う。その時が来るまでに、強くならなきゃな、などと場違いな思考が浮かんだ。

そうして、二つは衝突し。

光の奔流に包まれ——わずかに遅れて、凄まじい爆発音が響いた。

『『『『『きや、きやあああああああッ！？』』』』』

最初の一撃の比ではないその規模に、アリーナの周囲を守る防壁がビリビリと揺れ、一部は何かの破片が当たったのかヒビが入るものすら存在した。

思わず、観客席の少女達は顔を手で覆う。あまりにも強大な、意識を奪われそうなほどの光と音の暴力が襲い掛る。

だから——勝敗を決めるブザーの音には、誰も気付かなかった。

どのくらいの時間が過ぎただろうか。

ようやく目と耳を回復させた彼女達は、恐る恐るアリーナを見る。グラウンドには巨大なクレーターが出来ており、今の一撃の凄まじさが端的に表されていた。

彼らはどうなったのか、と砂埃が舞う中を少女達は目を凝らそうとして、

『……やっぱすげえな、零夏は』

その前に——力を全て出し切った、というような一夏の声が聞こえた。

え、ひょっとして弟くんが勝ったの！？という叫びが少女達の間で広がって周囲がざわめく中——とある女子は、いち早くモニターリングされていたエネルギーの残量表示を見つける。

「ふわ〜……接戦だったんだねー……」

のほほん、と呟いたその声はザワザワと響く話し声に消える。
そして、更にそれを上書きするように拡声された兄弟の台詞が周
囲に響いた。

『つたく、こんなんで弱い弱い言ってたつーんだから、いい加減
嫌味のひとつも言いたくなるぜ』

『いやあ、どうだろうね？始まる前はアレを使うとは思ってなかつ
たよ僕』

『というか、実際俺は最初の一撃でハンデがあつたのに負けたのか
……』

白式：エネルギー残量0
ヘラクレス：エネルギー残量43

「「あつ……」」

モニターに表示された数字にようやく気付いて、箒と真耶の声が
重なった。

それを見てようやく一息ついて、千冬はやれやれという表情で椅
子に座り直す。横の棚からインスタントコーヒーを出し、帰ってき
た弟達になんて言ってやろうか、などと千冬は思った。

——やがて、砂埃が完全に晴れる。

そこには、大の字になって倒れている一夏と。

斧剣を地面に突き刺して、そこに寄りかかる零夏の姿があった。

ぼんやりと一夏の身体が光り、『白式』が解除されガントレットとして待機形態に変化する。

良くやってくれた相棒を一撫でしてから、一夏は零夏の方を向く。それに応えて、零夏は立ち上がり一夏に歩み寄った。

「まあ、僕はお兄さんだからね。——今回は勝たせてもらったよ」
「ああ。でも、いつか越えてやるからな」

そうして、兄は弟に手を伸ばす。
その手を握って立ち上がり、弟は笑った。兄も、それに釣られるように笑顔を見せた。

観客席から、歓声上がる。

ピットの中では、筭が急いで外に出ようとロックされたドアを蹴り飛ばし、千冬がどこからか出した出席簿で制裁されていた。

世界初の男子IS戦。その勝者は――

――兄である、織斑零夏だった。

L i f e 7 全て超えるのなら、白になれ（後書き）

推敲終了。『誤字』はミミズのように這い出てくる…！！

さて、今回の話。まずはセシリアさんのお話でもしましょうか。

この作品の彼女は、『男』というものを全て『父親』と重ねてしまっています。故に零夏たちのことを最初から『自分より下』という先入観を持ちながら扱ってしまっていますね。

これはとても傲慢なことだと想います。『はー、わたくし傲慢ですわーマジっべーですわー誰かにプライド碎いてほしいですわー』的なキャラが今のちよろいさんです。なにこれウザい。

だからこそ、彼女は一夏と真正面から向き合って、その姿を見た時に『もっと知りたい』という恋心を芽生えさせる…という設定です。この作品では。

まあ、何故こんなネタバレをしているかというと一夏VSセシリアは都合によりカットだからです。だって原作でやってるし…。次の戦闘は零夏VSセシリアになりますね。

さて、次。零夏の弱さについてです。

チートが無いと弱いというのが零夏の自己評価ですが、実際彼はそこまで弱くありません。そもそも、死という絶対の事実からある程度逃れている時点で見方によっては『強い』ですよ。

とはいえ、一夏からのお墨付きを貰ったからといって彼が『あ、俺強いんだ』と急に最強主人公になるわけでもありません。当然ですね。

ただ、彼は弟に胸を張れるくらいには強くなりたい、と願い始めました。もしヘタレのままだったら、零落白夜に怯えて目を逸らし試

合に負けていたのは零夏のほうだったかもしれません。

ここらへんの描写は本当に苦労しています。言葉にできないことを文章にするのは難しい……

さて、最後に『ヘラクレス』の強さについて。

感想でもさんざん言われてた百頭、ついに出せましたよ！

とはいえ今回の本編でもおなじみの斧剣バージョンです。あの斧剣はアインツベルンがヘラクレスに縁のある神殿の柱を加工して斧剣にし、聖遺物として使ったようです。

とはいえ、聖杯戦争で武器として使ったので、多分百頭の武器リストにはしっかり入っているでしょう。

で、斧剣による『本気の一撃』が、エネルギーを全力でつぎ込んだ零落白夜の一撃とほぼ同じ威力、という具合ですがいかがでしょうか。バランスの扱いが難しいです……。

ちなみに、士郎くんが使った九連撃は単純にこれを9回、というわけではありません。

今回のアレとはまた別のベクトルで用いた『本気の一撃』です。イメージとしては `unlimited codes` の『巨人の一撃』。相変わらず例えがわかりにくいな俺。

FateZeroとかを見るとパラメータはどう表現すればいいのか本当にわからなくて困りますよ……そもそもセイバーは魔力放出入れて敏捷Aなのだろうか？

さて、今回はVSセシリアさん……に行けたらいいなあ。

まずは零夏の自室待機からです。ある程度楯無さんへのテコ入れが発生しますよ、ファン必見！

今度は遅れないように頑張ります、それでは

L i f e 8 誰もが欲し、望むもの（前書き）

前回、楯無さんの出番があると言ったな。

あれは嘘だ

申し訳ありません。尺などの様々な都合でこんな事になってしまいました…

いや、生徒会長って解説役として便利じゃないですか？姉さんは前回散々解説ポジションにいたのでじゃあ次はちよっと別の人に出番あげるかー、ということとで急遽予定を変更した結果今回は会長の出番がナシということに。

…そして結局、出来上がった本文を見返してみると千冬さんのほほさんさんの大勝利でした。あとモツピーも。どうしてこうなった。

アンケートは次回の話を投稿するまで、ということにさせて頂きます。

ハーレムについてのご意見をお寄せ下さった皆様、本当にありがとうございます。うございました。

Life 8 誰もが欲し、望むもの

——試合の後、ピットに戻った僕と一夏を待っていたのは、

「アリーナの土を丸ごと吹き飛ばす気が、馬鹿者共」

という姉さんのありがたーいお言葉と、すぱーん！という出席簿による無情の一撃だった。

今更の説明になるけど——IS学園の中でも『専用機』を保有している人物はほんの一握りでしかなくて、それ以外の人達は当然、学園が貸し出す『訓練機』で日々の鍛錬に励んでいる。

ということは、その『ラファール・リヴァイヴ』や『打鉄^{うちがね}』などのISを使う練習には当然、安全で広いスペースが必要になるわけだ。そんなわけで、IS学園では各生徒が申請すればアリーナの使用权利と訓練機をレンタルすることができる。普通はこの二つの申請をしてから練習やらをするわけだね。

仮にも難関入試を突破して入学してきた少女達だ、空を飛ぶことに対してやる気が溢れていないわけがない。そんなわけで——この学園の訓練機およびアリーナ使用許可予約は、常に一杯だそうである。

つまり、僕たちが使ったこの第3アリーナも当然、この後に使う人達がいたわけで。

『飛ぶ鳥跡を濁さず』ということわざを完璧に無視してしまった弟達に対し、してはいけない（戒め）という意味を込めて姉さんは愛の鞭を振るったわけなのである。……確かに僕たちも悪いけど、

今たくましく成長を遂げた肉親に対してなんて仕打ちなんだい姉さん！

「他人に迷惑をかけるのを怒る。家族として当然のことだろう？」

「なんとという正論」

相変わらず他人に厳しく、身内には更に厳しい姉上殿でございました。

まあ、実際のところは『教師』という建前もあるし、今この場では個人的な言葉を言うべきではないって姉さんなりに判断した結果なんだろうけどね。

——より正確に事実を言うなら、彼女は山田先生や箒ちゃんに普段の自分を見せるのを躊躇ったのだろう。

些細な日常会話から実は姉さんが『おい零夏、お前は枕になれ。

一夏はマッサージをしろ。全身くまなくやるように』などと下着姿で言い放つだらしねえ人間なのだとバレるのが嫌だったに違いないのだ！

いやはや、こんな姿をファンが見たら『世界最強のブリュンヒルデ』が『ブリュンヒルデ（笑）』になってしまうよ……やべえよやべえよ……

……しかしいつも思うんだけど、姉さんは女性なんだからもって年頃の弟に気を遣うべきだよなあ。

「頭の中で余計なことを考えるなこの馬鹿者め（シュバツ）」

「（パシィツ） 姉さん、図星を突かれたからって暴力に訴えるのはよくないって」

「何が図星だこのヘタレめ。第一、家族に対してそんな目を向けて

いるのかお前は？」

「と、一夏に身体を触られて微妙に頬をほんのり染めていたお姉さまが申しております」

「……（シュバババババツ！！）」

「……（パシシシシシッ！！）」

「ふ、2人の間で超高速で出席簿の応酬がーっ！？」

無駄に高度なそんな攻防は、いい感じに山田先生のツツコミでオチがついていたのであった。流石本音ちゃんと並ぶ癒し系女子だ！本当にありがとう先生！

あ、念のため言うておくけど僕は姉さんの攻撃を防御しているだけだからね。反撃とかしてないよ？あくまで暴力的なのは姉さんだけだ、ということをごここに一応記しておくことにする。

『……ぐふう（フラフラ）』

『い、一夏大丈夫か！？流石に今の一撃は……うひゃあっ！？』

『……ぐえー』

『あ、わ、わわわわ……（ななななんだこれは一夏が私に抱きついててててて）』

ちなみに、僕と違って割と疲労困憊だった一夏は残念なことに姉

さんの一撃を受けそのままダウンしてしまい、篝ちゃんの胸に顔から突っ込むというT.O.L.O.V.E.を起こしていた。いや、どうしてそうなるんだ後ろに倒れるよというツッコミは恐らくするだけ無駄なのだろう。

……うん、なんというかその——いつものことだけど、一夏はいつぺん爆発しろバーカ!!

「……はっ！？姉さん、まさかここまで狙っていたのか……!？」
「ふっ」

不敵な笑顔がとんでもなく似合う美女が目の前にいた。
流石我が姉である……大した奴だ……。

ちなみに、真っ赤になりながらも口のニヤけを隠せない篝ちゃんの顔は非常に面白かったと言っておこう。これが恋する乙女の顔ってやつなんだろうか。

多分これを見ていた束さんは光の速さで録画に走ったんじゃないだろうか。なんとなくそんな気がした。

『な、なんでバレたの!？』

貴女もいつぺん、妹に殴られておくべきだと思います。

……さて、喧嘩とも言えない微笑ましいコミュニケーションに一区切りがついたところで、そろそろ真面目な話に戻るとしよう。表情を改めた僕に、姉さんも出席簿を下ろして真顔になる。

「姉さん。明日はまず、一夏とオルコットさんの対戦だっけ？」
「そうだ。お前と先にやらせるとオルコットが気絶する可能性もあり得るからな」

大真面目に返す姉さんに、山田先生は『え？え？』という顔をして僕達の顔を交互に見ていた。急な雰囲気の変わり方に驚いたのか、それとも今の発言が信じられなかったのか、どちらだろうか。

気絶させるなんてそんなことはない——と言いたところだけれど、実際は十分に有り得るから困ったものだ。ISの防御をブチ抜いてしまうほどに僕の攻撃の威力は大きいからね。

というか、入試の時に倒した先生がまさにいい例だ。17秒で決着したあの試合のように、ヘラクレスの能力は初見の相手に対して非常に有利なのである。

「まあ、白式的能力も大概な初見殺しだし、ひょっとしたらオルコットさんを気絶させちゃうかもよ？」

「いや、零落白夜は私が使っていたからその理屈は通じんな」

「ありや、そうか。まあ才能はありそうだし大丈夫じゃない？ ほら、今回も僕のエネルギーけっこう削ったし」

「……えーと、零夏くんのエネルギーが減っていたのは最初素手で戦っていたからでは……？」

「その通りだ真耶。実際のコイツは今の一夏を無傷で倒せる」

姉さんの言葉に思わず苦笑する。……それは事実だけど、もうちょつと一夏をいたわる発言もしてあげたらどうなんだい姉さん？ 心の中で思ってるだけだと山田先生は誤解しちゃうかもよ。

——そもそも、僕にとつての『シールドエネルギー』というものは全て束さんが用意した『攻撃を喰らったように見せかけている』だけのまやかしに過ぎない。

先程の戦闘は周囲には接戦に見えていたかもしれないが、実際のところ僕は傷ひとつ付いてはいないし、そもそも僕は事実上生身で戦闘を行っているのだからシールドエネルギー無しでも戦闘が可能だ。つまり——ISを相手にしているにも関わらず、僕は手加減しているのである。

けれど。

圧勝したからと言って、僕が一夏を評価していない、ということにはならない。

……本当なら、彼女とは真面目に戦う気なんて僕は無かった。ISに乗れないから彼女の言葉に付き合う義理も資格もない、というのも本音だが、それ以上に僕は戦闘に関する『誇り』^{プライド}なんてものを持っていなかったのだ。

僕は弱い。だから、強さを誇るなど出来るわけがない。——そう、ずっと思っていた。だけど、

——こんな僕でも、誇れるものが出来てしまった。

いやはや、困ったことに手軽な逃げ道を潰されちゃったわけだ。やっぱり織斑家に生まれたというのは壮大なフラグだったんだなあ、と思う。だけど、僕は今まで一夏の兄であることに、姉さんの弟であることに——後悔したことなんて、一度も無い。

「ふん。少しはマシな顔になったな」

「……え？」

何時の間にか僕の顔を見据えた姉さんが、機嫌良さそうに笑いながらそんなことを言い出した。

おや、僕は今どんな顔だったんだろう？というか隣にいる山田先生が何時の間にか顔を背けていた。え、なんですかそのリアクション？ひよつとして気持ち悪い顔だったのだろうか……すっごい気になる。

「さて、そろそろ会話も切り上げ時だな。零夏、お前は明日の試合とこの後の生徒のためにグラウンドをきっちり整備をしておくように」

「……えっ？いや、その試合僕も出るんだけど……？」

「知らん。土を吹っ飛ばしたのなら責任を取れ」

「なにその鬼畜っぷり！？というか、それなら一夏も手伝わせるべきで……あ、ごめん箒ちゃん。やっぱいい、一夏はそのままでもいいからそんな絶望した顔をこっちに向けないで」

「って一夏くんっ！？な、何やってるんですかあああ！！！」

どうやら先程のことを根に持っているのか、姉さんはサラリと理不尽な要求を僕に下していた。なんてこつたいこの休日下着女め！まあ、正直僕が悪いからやるべきなんだけどね……

今更箒ちゃんと一夏の状態に気付いたらしく、『不順異性交遊ですー！』などと叫ぶ先生を横目に、僕はがっくりと肩を落としながらすこすことアリーナに引き返すことになった。やれやれ、土つてどこにあるんだか。あと、非常にどうでもいいんだけど、百頭でスコップって具現化できるのかなあ……？

そうして歩きながら、ふと、明日のことに想いを馳せる。

——果たして、セシリア・オルコットという少女は一夏とどんな戦いをするのだろうか？

原作のようにエネルギー切れという展開は有り得ないだろう。彼女が慢心を消し去って勝つか、はたまた一夏の刃がその身体に届くのか。

そして、僕と彼女はどんな戦いをするのだろうか。

口元に笑みが浮かぶのを感じながら——誰に言うわけでもなく、僕は独り呟いた。

「——悪いけど、負けてあげないよ。なにせ僕は、『織斑零夏』なんだから——」

——さて、そういうわけで翌日、試合当日。

「どうしてこうなった」

現在、僕は昨日のオルコットさんと同じ理由（相手のISの情報
を不正に入手しないため）で、自室での待機を命じられていた。

そんなわけで暇な僕は寮の部屋でソファ―に沈み込んで改めて昨
日のことを振り返り、やや眉を八の字にしながら——そんな一言
を呟く。

本当に、僕は後先考えずに色々やらかすのをどうにかした方がい
いんじゃないか。何かこの悪癖で将来大変なことをやらかす気がし
てならない……

あ、別に試合のことを後悔しているわけじゃないよ？大観衆の前
で宝具発動とかやってしまったのは色々マズかったと思うけど。…
…いやはや、協会がこの世界にあつたら間違はなく執行者が仕向け
られているだろ？暴拳だね。とはいえ、この世界には協会どころか

魔術すら無いから問題ないんだけど。

恐らくは射殺す百頭のこともIS特有の『ナインライフス単一仕様能力』として処理されるだろう。たとえ疑問に思う人がいたとしても『篠ノ之束の作品ですから』の一言で済んでしまうから多分大丈夫のはず。…束さん便利すぎるなあ…

そんなわけで、あの戦いではむしろ僕のこれからの人生に関して得るものがあつた。だからそこに文句を言う気は無いんだけど…
…こう、なんというか…『シリアスじゃない部分』で僕、昨日は色々なモノを失ってしまったんだよねえ。

「昨日はすごい人気っぷりだったもんねえ」

「遠巻きに見ていたけれど、アレは確かに凄かったわね。ふふっ」

「言わないで！申し訳なさで胸が痛いから！！」

2人の少女達の言葉が、僕の心にグサグサと刺さって痛かった。

…いや本当にごめんね、迷惑かけて。

あの戦闘の後、僕と一夏は一躍『時の人』となった。

ただでさえ男子操縦者として有名だったのに、なんと強さも兼ね備えていた織斑兄弟。一夏のイケメンっぷりや僕の『令装』やら宝具の神秘性も人を惹きつける要因になったらしく、昨日からずっと

僕達のもとには数えるのも面倒になるほどの女子が殺到していた。

実はついさっきも（具体的には一夏VSオルコットさんの試合が始まるまで）この部屋に女子が多数押し寄せてきて、非常に騒がしい空間になっていたのである。しかもその騒音の大半が『キヤアお兄さまわたしのことも妹にしてええええ！』という叫び声をあげながら。

これには流石の僕もドン引きである。……というか例え本人じゃなくてもこんな台詞を聞いたらドン引きするわ！

しかも叫ぶ少女の中には上級生までいたし……年下のお兄さまってどうなのさ。いや、精神年齢は上なんだけどさー。なんだか姉さんの気分の一端を味わってしまったよ。

にもかかわらず、この姉妹はテンパる僕を横目に笑顔で少女達に対応し、落ち着かせ、そして整理券を配り解散させるなどという神がかった手際の良さを見せてくれたのだ。……なんという交渉力だ。この学校の生徒会って本当に凄い。

「ああ、気にしないでください。私達は色々慣れていきますからね」
「私は邪魔で、お姉ちゃんがすごいんだけどねえ」

「いや、それにしたって……わざわざクッキーまで焼いて持ってきて頂いたのに、部屋の前が女子で埋まってた、なんてさぞかし引いたでしょう？ 虚さん」

さて、いい加減に本音ちゃんの隣にいる目の前の先輩についての説明をすることにしよう。

彼女の名前は布^{うっほ}虚——苗字の通り本音ちゃんのお姉さんで、

IS学園の生徒会に所属している三年生である。

ぼわーんとした本音ちゃんとは反対にキリツとした雰囲気纏う言うならば『メイド長』のような人で、人当たり・処理能力に加えて紅茶まで淹れるのが上手いという極めて有能な先輩だ。

そして更に彼女が持つてきてくれたココアクッキーも非常に美味しい。しかも僕が大食いなのを事前にリサーチしてくれていたらしく袋いっぱい的大量に用意してくれていたという親切っぷりであった。

なんて素晴らしい人なんだッ！なんというか、こういうメイドさんが一家に一人いるとすごい生きているのが楽しくなると思う。

「うーん、しかし何個食べてもうまいなあ……しつとりとしていてそれでいてベタつかない。ココアは……あれ、まさかこの味から察するにお手製ですかこれ？」

「ふふ、ありがとう零夏君」

「意味深！」

さりげない動作でお皿にクッキーを追加しつつ、にこやかに虚さんは微笑んだ。

……あー、こういう微笑みとかを見ると、性格は真逆だけどやっぱり本音ちゃんのお姉さんなんだなーと思う。柔らかい笑顔がそっくりだ。元々顔立ちは似てるしね。

原作だと彼女はこれから弾と流れるようにフラグを建設していくんだけど——この有能さを考えると、僕が介入してでも迅速にフラグ設立をしておいたほうがいいのかもしれない……！今度、偶然を装って弾とエンカウトさせればいい雰囲気になるんじゃないか？ひよっとすると弾の実家のメシ屋のメニューにお菓子が追加され

る日が来るかもしれないんだ、やってみる価値はありますぜ！そう
なったら多分週3くらいで通うよ僕！がんばれ弾、主に僕の幸福の
ために！！

……などと、脳内で将来の食生活に想いを馳せている僕であった。

そんな中、思考を現実に戻すと……本音ちゃんが空になったクツ
キーの袋を持ち上げて『んあ〜』と大口を開けていた。どうも中に
残った欠片を食べたいらしい。相変わらず動作がいちいち可愛いな
あ本音ちゃん。でも、女の子がそんなことしていいのかい？

って、あ。虚さんが何時の間にか妹の後ろに回りこんでる。そし
てそのまま静かに拳を振り上げて――

「ごちんっ！

「意地汚いわよ、本音。しかも男の人の前でそんなことしないの」
「へうふう〜……れーか君、お姉ちゃんがぶった〜」
「おっとっと。あーほら、よしよし」

虚さんが本音ちゃんにゲンコツを落としていた。なんというか、
織斑一家も傍から見るとこんな風に見えているのだろうか？結構痛
そうな音だったけど。

そんなことを考えつつ、隣から身を乗り出して小動物のように抱

きつてきた本音ちゃんの頭を撫でてやる。うん、コブにはなつてないね。そのへんの手加減はキツチリ虚さんもわかっているみたいだ。

ああ、それにしても女の子の身体って何故こんなに柔らかいんだろうか。東さんや姉さんのおかげでポーカーフェイスは身についていると自負しているけど内心ちよつとドキドキだ。本音ちゃん可愛いし。いやはや、この可愛さが癒し系でなければ危なかったかもしれぬ。

「ところで、僕のあだ名は『れーか君』なんだね本音ちゃん」

「はふう……ん？『おりむー』だと一夏君と被っちゃうでしょ？」

「うん、そうだね。『お兄さま』よりそっちの方がずっと良いよ」

「でも、れーか君ってお兄ちゃんみたいだね。あ、そういえばお兄ちゃんだったねえ」

「ほれほれ妹よナデナデしてあげよう。わしゃわしゃわしゃー」

「わわわ、いい気持ち」

「（……この2人はどういう関係なのかしら……バカップルにも兄妹にも飼い主とペットにも見えるわ……まだ出会って一週間くらいよね……？）」

ああ、本当に可愛い生き物だなあ、本音ちゃん。この子も一家に一人欲しいよまったく。

そんな風に彼女の頭を撫でることに集中していて、虚さんがこちらのことを不思議そうな目で見ていたことに、僕はまったく気付かなかったのであった。

『…………あれっ？私の出番は？』

そんなわけで、視界の隅に映る人影から全力で目を逸らしつつ――次回に続きます。

L i f e 8 誰も欲し、望むもの（後書き）

こうして、零夏は学校中の人々から『お兄さま』と呼ばれることが決定したのでした。どこのエルダーだよ……

さて、今回は前回の反動から思いっきり日常話でしたね。そんな中、零夏のちよつと成長した姿を描写してみたり。

やっぱりウチの主人公は『兄』という属性が濃いです。まあ精神年齢が高いので当然とも言えるんですが、元々あった素養にヘラクレスの力強さが追加されて更に鉄壁になった、といったところでしょうか。

のほほんさんが懐いている理由もここにあるんでしょうね。

書いてて急にデレすぎじゃね？とも思いましたが元々一夏に抱きついてくるような子なのでまだまだ恋愛感情には至っていないのでしょう。

零夏との恋愛イベントはもつと劇的であるべきだ！ということできつとご理解をお願いします。

いやあ、恋愛を自覚させるイベント早く書きたいなあ。

さて、虚さん関連の話は次回の後書きにまわすとしみましょう。

で、ここからは完全に僕のどうでもいい話になるんですが、皆さんはF a t eの外伝である『プリズマ・イリヤ』はお読みになっているでしょうか。

僕はコンプエースをこの作品のためだけに買っているのですが、ちよつと今月号を見てくださいよ。

お、お嬢様アアアアアアアアアア！！！！

本当にどうしてこうなった。続きが気になりすぎて死にそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3669x/>

僕は違います

2011年10月30日16時15分発行